

研究ノート

第 22 号

目 次

茨城県域における縄文時代中期の屋内炉	駒澤 悦郎	1
－時期・地域毎の形態的特徴について（考察編）－		
茨城県南地域における古墳時代後期の集落集成について	根本 佑	31
つくば市元中北東藤四郎遺跡の火葬墓	天野 早苗	39
－第 82 号土坑の再報告－		

2025. 3

序

公益財団法人茨城県教育財団は、昭和52年度に埋蔵文化財の調査・整理を担当する調査課を設置して以来、県内各地に於いて649か所にのぼる埋蔵文化財の発掘調査を実施し、481冊の報告書を刊行してまいりました。また、講演会や現地説明会等を実施し、広報誌等も刊行し、埋蔵文化財の保護思想の啓発・普及に努めてまいりました。

本誌は、職員の日頃の研究成果等を掲載するものです。本号は掲載本数が少ないですが、これらの成果が、茨城県の考古学の進展に少なからず貢献できるものと期待しております。

本誌の刊行にあたり、ご指導、ご協力を賜りました関係各位に感謝いたしますとともに、今後もなお一層のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

令和7年3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 森 作 宜 民

茨城県域における縄文時代中期の屋内炉

一時期・地域毎の形態的特徴について（考察編）一

駒澤 悦郎

1 はじめに

縄文時代の炉跡が日本で初めて発見された遺跡は、新潟県上越市清里区の黒保遺跡であると言われている。黒保遺跡は、新潟県の南西部にある中頸城郡のほぼ中央に位置し、縄文前期～晩期の大規模集落遺跡である。1914年に坪井正五郎氏が石組炉を調査し、人類学雑誌 293号に「石器時代火焚場」¹⁾と題して紹介されている。現在、この炉跡は普原神社裏の公園に移築・保存されている。

縄文時代の屋内炉研究は、竪穴建物跡の形態研究と複雑に関連しながら、屋内炉の形態論、用途論、変遷過程などの研究が進められてきた。屋内炉は、竪穴建物の機能差（住居か否か）を強く物語る内部施設として、各県の報告書の中で形態論、用途論、変遷過程などに触れられることが多い。また、東北・北陸地方を中心に関東地方の一部にも分布している複式炉は、梅宮茂氏が福島県福島市飯野町白山遺跡で発見した巨大な炉に対して「複式炉」²⁾と命名以降、現在に至るまで数多くの個別研究が進められている。なお、白山遺跡の竪穴建物跡と複式炉は1958年に後藤守一氏の指導により復元され、現在、それらは県指定史跡となっている。近年における茨城県域の縄文時代の屋内炉研究では、荒蒔克一郎氏による茨城町宮後遺跡における縄文時代中期の炉跡の形態研究³⁾、鈴木素行氏ほかによる茨城県域の縄文時代中期後葉の屋内炉の集成・分類⁴⁾、亀井眞氏による炉体土器の使用痕跡研究⁵⁾などが見られ、いずれの研究も縄文時代中期の屋内炉の形態論、用途論、変遷過程などに言及したものである。

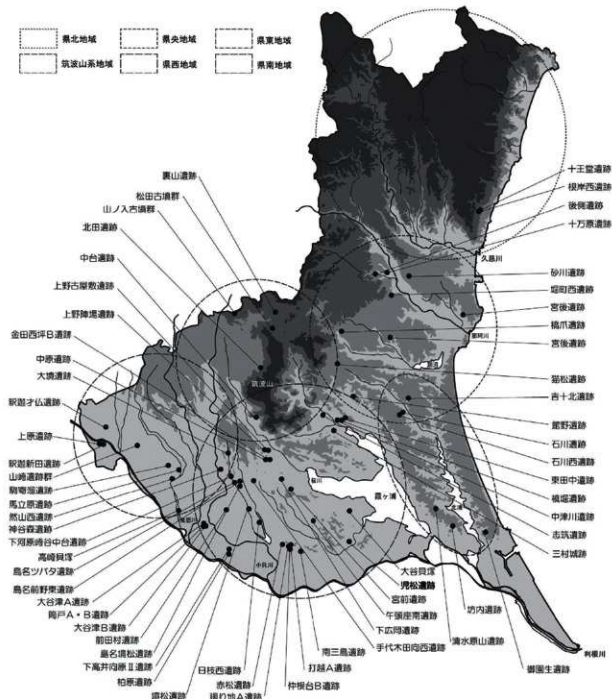
筆者は、茨城県域の縄文時代中期の屋内炉について、時期的・地域的な形態的特徴を把握することを目的に、これまでに公益財団法人茨城県教育財団が調査・整理報告した遺跡の中から、縄文時代中期の屋内炉を集成した（駒澤悦郎・山崎絵美子「茨城県域における縄文時代中期の屋内炉―時期・地域毎の形態的特徴について（資料編）―」「研究ノート」第21号 公益財団法人茨城県教育財団 2024年）。なお、縄文時代中期を選択した理由は、他時期に比べ屋内炉の形態が複雑な様相を呈し、比較的にまとまった資料 数になるためである。本稿では、約1世紀にわたる縄文時代の炉跡研究⁶⁾を回顧し、その成果と課題を整理した上で、筆者らの集成結果の分析と考察を行い、県域における縄文時代中期の屋内炉について、時期的・地域的な形態的特徴を明らかにする。

2 資料の集成について

前掲書の「茨城県域における縄文時代中期の屋内炉―時期・地域毎の形態的特徴について（資料編）―」では、当財団が調査・整理報告した遺跡の中から、縄文時代中期の集落跡を選び出し、さらに屋内炉が確認できた竪穴建物跡を集成した。

その遺跡数は63か所、屋内炉の確認数は1056基（竪穴建物跡1棟から複数の炉が確認された場合でも1基とカウント）に上った⁷⁾。地域区分については水系別・地形区分などをもとに、県北地域（久慈川以北）、県央地域（澗沼川水系・那珂川以南）、県東地域（北浦水系）、県南地域（小貝川下流・霞ヶ浦水系）、筑波山系地域（筑波山系丘陵部）、県西地域（利根川・鬼怒川・小貝川中流）の6地域に分けた。地域毎の

対象遺跡（当該団が調査・整理報告した遺跡）の分布状況は、県南地域と県央地域が他地域を凌駕している。この現象は、これまでの大規模な開発工事が県南地域と県央地域を中心として行われてきたことと大きく関係している。特に県南地域の龍ヶ崎市南三島遺跡、つくばみらい市前田村遺跡、そして、県央地域の茨城町宮後遺跡などが大規模調査例であり、それぞれ縄文時代中期の集落跡全体を調査した茨城県屈指の遺跡と言える。



屋内炉の形態については、「地床炉」、「土器埋設炉」、「石囲炉」、「土器片囲炉」、「石・土器片囲炉」、「石組炉」、「複式構造炉」に大別した⁸⁾。また、「地床炉」の深さについては、「0～20cm」、「21～40cm」、「41cm～」の3つに細分した。「土器埋設炉」については、「Ⅰ類（炉床面が埋設土器の外まで広がるタイプ）」、「Ⅱ類（炉床面が埋設土器の内て完結するタイプ）」に細分し、また、埋設土器の「単独」・「複数」を記録した。「石囲炉」と「石・土器片囲炉」については、「一部開口」・「全周」（炉石の残存状況と抜き取り痕などから判断）、また、埋設土器の有無を記録した。「石組炉」については、大形竈で方形基調に囲繞した炉跡とし、小形竈で隅形基調と炉石の数・配置方法が異なる「石囲炉」と区別した。狭義の「複式炉」とは、大木9・10式期の岩手県・秋田県・新潟県・富山県・福島県・栃木県・埼玉県に分布し、「土器埋設部」・「石組部」・「前庭部」から構成される炉跡である。茨城県域から狭義の「複式炉」は確認できなかったが、狭義の「複式炉」との関連性が強い複式構造の炉跡が1基確認できた⁹⁾。

3 集成結果の概要について

屋内炉の各形態毎に時期的な形態変化の概略を述べる。地床炉の平均規模（長軸（径）×短軸（径）×深さ・単位：m）は、阿玉台式・中峠式期が $0.81 \times 0.66 \times 0.09$ 、加曾利EⅠ式期が $0.87 \times 0.65 \times 0.1$ 、加曾利EⅡ式期が $0.92 \times 0.71 \times 0.12$ 、加曾利EⅢ式期が $0.96 \times 0.76 \times 0.2$ 、加曾利EⅣ式期が $0.85 \times 0.7 \times 0.2$ となる。加曾利EⅢ式期になると規模が大きくなる傾向が指摘できる。土器埋設炉は阿玉台Ⅲ式期から確認でき、加曾利EⅠ・Ⅱ式期でⅠ類を主体として急増する。加曾利EⅢ式期以降になるとⅡ類が数を増やし、加曾利EⅣ式期になるとⅡ類が主体となる。石囲炉は阿玉台Ⅳ式期から確認でき、加曾利EⅠ～Ⅲ式期にかけて徐々に数を増やし、加曾利EⅣ式期になると激減する。土器片囲炉は中峠式期から確認できるが、加曾利EⅠ式期には認められなかった。加曾利EⅡ式期も少なく、加曾利EⅢ式期でピークを迎えるが、加曾利EⅣ式期で激減する。石・土器片囲炉は加曾利EⅢ・Ⅳ式期でわずかに確認できる。石組炉は筑波山系・県央・県北地域の加曾利EⅢ・Ⅳ式期、特に加曾利EⅣ式期が主体となる。複式構造炉は県南地域の加曾利EⅢ式期の前田村遺跡第347号竈穴建物跡で確認できた。

4 縄文時代の炉跡研究について

多くの場合、縄文時代の竈穴建物には付属施設として屋内炉が構築されている。中でも縄文時代中期における屋内炉の形態的なバリエーションと構造化した発達過程はどの時期よりも異彩を放っている。言うまでもなく、炉辺空間は何時の時代でも人々が集い合う空間であり、建物構造の変化、生活環境や生産の変化、世帯や集団関係の変化などを敏感に反映する空間でもある。ここでは、これまでの縄文時代の炉跡研究を回顧し、縄文時代の炉跡研究の潮流と研究課題などを概観しておきたい。

縄文時代は言うまでもなく、日本列島で土器が製作された最初の時代である。土器の出現については、後永期の技術的革命的な出来事、「縄文革命の原動力」と言った評価がなされており、誰もが認めるところである。一方で、縄文時代は土器の発明と煮沸行為の出現とともに開始されたと考えられながら、土器を焼き、土器で煮沸するということを可能たらしめた火の使用と管理形態の歴史的な発展過程については、まだまだ十分な歴史的な体系づけがなされていないと言える。縄文時代における火の使用と管理形態の急速な発展は、土器の出現と等しく歴史的な出来事であったと考えられる。縄文時代の炉は、その構築における技術的な側面と使用における機能性や精神性などが交錯する中で展開し、その形態が時空間的、集団的なまとまりを形成する点こそ、この時代の1つの特徴であると考えられる。しかし、縄文時代の炉跡研究は、従前から「住

居跡」の単なる付属施設であるという一般的な認識によってあまり進展してこなかった。まだ、弥生・古墳時代のそれと比較して積極的に研究されてきた経緯はあるが、その「時期的変遷・形態・機能を体系的に検討されていない」¹⁰⁰ が現状である。研究史的には、東北地方の複式炉、八ヶ岳南麓や関東地方の縄文時代中期の炉跡についての研究はかなり取り組まれており、論考自体の数は限られているものの、これらは炉跡自体の個別研究として高く評価することができる。

炉跡研究の第1期は、堅穴建物跡の付属施設として、または単独で発見されはじめた1920年代後半から1930年代前半までである。代表的な研究としては、坪井正五郎、柴田常恵、谷川（大場）磐雄、直良信夫、後藤守一の各氏の論考を上げることができる¹⁰¹。当期の重要な点を整理すると、①炉跡の有無が堅穴建物跡の性格、特に住居か否かの判断材料として考えられていること。②炉跡の形態や規模によって、その性格や用途が大きく異なる可能性があること。③土器を埋設した炉跡には湿気防止と廃物利用の側面があり、石囲構造の炉跡には熱せられた緑石の調理における有効利用など、実利的な性質が認められること。以上の3点にまとめることができる。その後、炉跡研究は、隆盛の兆しが見えはじめていた集落研究の中に埋没していくことになる。その過程からは、炉跡という個別研究の限界があったことが伺える。

炉跡研究の第2期は、1930年代後半から1950年代までの間で、少数ではあるが炉跡の形態分類や集落内での変遷過程が問題にされはじめる。しかし、ほとんどが概説的な記述に終始し、大きな学会の流れである集落研究の中に吸収されてしまう。こうした炉跡研究のあり方は、この時期の特徴と言える。当期を最も特色づけた研究として、宮坂英次氏の一連の研究が上げられる¹⁰²。特に1950年の「八ヶ岳西山麓と助尾根先史集落の形成についての一考察（上）・（下）」（『考古学雑誌』36-3・4）における氏の問題意識は、集落の形成過程の把握が方法論的にどのように行えるか、という点にあったと私考する。つまり、埋壺炉、堅坑炉、石囲炉という3型式の炉と、堅穴建物跡の形態、遺物の遺存状況などから集落成立の問題に論究されたのである。結論的には、埋壺炉を有するもの、堅坑炉で堅穴の平面形が前时期的なもの、堅坑炉のもの、堅坑炉と石囲炉で平型のもの、石囲炉で立型のものへと順次発達したという変遷観を述べられている。また、堅坑炉と石囲炉との時間的、構造的な関係に触れられ、堅坑炉を石囲炉の炉石が居住地の移動に伴って家財道具とともに搬出されたものと推測されていることは、注目に値する指摘である。その他の研究としては、大宮守誠、赤星直忠、酒詰仲男、後藤守一、矢島清作、和島誠一、塚田光、江坂輝彌、寺田兼方の各氏の論考を上げることができる¹⁰³。中でも後藤、矢島、酒詰、和島の各氏による堅穴平面プランや炉の有無・位置・形態などに基いた民族の交代や環境の変化を想定する研究は、当期の中で特筆される点である。特に縄文時代中期における炉の形態的・構造的変化、存在意義の拡大について、矢島、酒詰の両氏が自然環境の変化に対する技術的な適応と考えられたことは、後世に大きな影響を与えることになる。また、塚田氏が炉跡の形態的特徴の時期的変化に加え、地域的なまとまりについて言及した点で、従前の研究とは一線を画すものである。当期の研究には集落研究という大きな流れに炉跡研究が次第にのみ込まれていく過程が色濃く見てとれる。しかし、炉跡の形態の名称が次第に統一され、その時期的・地域的变化に関心が高まった点で、炉跡研究の基礎が当期に構築されたと考えられる。特に、塚田氏の研究は次期に本格化する炉跡研究における分布論的研究の布石であったと言える。

炉跡研究の第3期は、1960年代から1990年代までの期間で、炉跡や埋壺などの堅穴建物内部の諸施設の個別研究が活性を帯びた時期である。炉跡研究は従前の研究とは系統を異にした形で開始されることになる。当期の炉跡研究は、①東北・北陸・関東地方の複式炉、②各地方の炉跡形態の変遷、③炉の廃絶行為とその意義、④縄文時代早期の灰床炉、⑤縄文時代前期の土器埋設炉やCピット、⑥屋外炉、⑦総括的な縄文時代

の炉跡形態の分析、以上の7分野に便宜的にまとめることができる。ただし、②・③・⑤については、堅穴建物跡の形態論的研究などの一端として考察されている場合が大半で、それぞれが炉跡研究の一分野という訳ではない。①の複式炉の研究は、それが東北・北陸地方に特徴的な形態で分布していることから、地域的な縄文社会構造の特殊性として考えられ、これまでかなり進んだ議論が行われている。それらの研究は炉跡の形態分類や機能論はもとより、上屋構造の復元や集落構成の分析¹⁴⁾、東日本の縄文時代中期社会の中心移動説¹⁵⁾などを生み出し、炉跡研究と縄文社会論との関連づけが早くから試みられている。②の各地方の炉跡形態の変遷では、中部地方、関東地方、東海地方、東北地方、北陸地方、北海道を舞台とした議論が展開されている。中部地方では、桐原健、藤沢宗平、林茂樹、折井敦、長崎元広、神村透、鶴飼幸雄、田村文夫、新津健の各氏、関東地方では、柳田敏司、岩井住男、岡崎文喜、谷井彪、加藤緑、笹森健一、柿沼幹夫、小川和博、海老原郁雄、鈴木美治、鳩崎弘之、木崎道昭、小野和之、丹野雅人、竹尾通、山本孝司、上川名昭、小林謙一、三上徹也の各氏、東海地方では、長田実、小野真一、向坂鋼二の各氏、東北地方では、市川金丸、古市豊司、富樫泰時、安田忠市、秋元信夫、高橋与右衛門、三浦謙一、佐々木勝、酒井宗孝、佐々木七郎、星川清親、庄司駒男、丹羽茂、越田和夫の各氏、北陸地方では、四柳嘉章、西野秀和、南久和、小島俊彰、山本直人の各氏、北海道では、宇田川洋、宮本長二郎の各氏によって踏み込んだ考察が行われている。これらの研究は、地域的には中部地方と関東地方を、時間的には縄文時代中期を中心としていることが明らかである。そのような中、地域的な枠組みを超えた炉跡形態の比較研究や、縄文時代の炉跡を系統的に把握する試みなど、本格的な炉跡研究に発展することはなかった。また、重要なこととして、研究者の関心が縄文時代中期の大形化した炉跡形態に集中していたことが、縄文時代全般の多様な炉跡形態から見れば、著しく偏ったイメージを形成してきたと言える。③の炉の廃絶行為についての考察は、宮坂氏の見解以降、炉の廃絶行為について触れた論文は僅かであり、ほとんどが集落構造の分析や堅穴建物跡の動態把握に関連する分野として、時として炉の有する精神的側面を強調する機能論的な研究が進められてきた。水野正好、伊藤恒彦、桐原健、村田文夫、八木光則、市川金丸、鶴飼幸雄の各氏の研究がその代表的なものである。④の早期の灰床炉の研究は、1985年以降に本格的に開始されたと言える。今村啓爾氏の「灰床炉」の提唱¹⁶⁾によって論議が活発化したもので、詳しい研究史については野中和夫氏¹⁷⁾などがまとめられているので割愛するが、縄文時代早期土器系土器群の堅穴建物跡の中央部付近に存在する方形の掘り込みが、灰を詰めた炉¹⁸⁾なのか、食料などの置場所¹⁹⁾なのか、あるいは堅穴建物廃絶後の意図的な掘り込み²⁰⁾なのか、その性格をめぐる意見が対立している。⑤の縄文時代前期の土器埋設炉やCピットについては、長崎元広、宮下健司氏が縄文時代前期の埋設炉の分布論的な考察²¹⁾や、堅穴建物平面プランと炉跡形態の分類や地域的な分布の偏在について論及されている²²⁾。笹森健一氏は1981年以降、縄文時代前期の堅穴建物跡の型式学的研究を行い、関東地方の堅穴建物跡について系統的かつ発生論的な考察をなされている。その中で「Cピット」という用語を使って、炉との関係や埋設土器の性格・用途について触れ、堅穴建物内の空間分割について炉のあり方に注目している²³⁾。横田光男氏は前述の笹森氏の見解を土台にして、縄文時代前期の関東地方を中心として、堅穴建物内の埋設土器の集成を行い、また、笹森氏の「Cピット」との機能差を類推している²⁴⁾。三田村美彦氏は、堅穴建物内の埋設土器について、関東地方の縄文時代前期前葉の類型を求め、炉跡と密接な関係のもとに出現するこれらの埋設土器が、縄文時代早期末葉に主体的な存在であった矢込土器が平底に変化し、それが縄文時代前期の炉の構造に影響を与えたのではないかと指摘をなされている²⁵⁾。⑥の屋外炉については、研究史上、屋内炉に比べて等閑視されがちで、個別研究自体まだまだ未熟である。屋外炉を考える上で2つの視点がある。第一に縄文時代早期の屋外炉と炉穴の問題、第二に縄文

時代における火使用の問題である。第一の場合、従前から縄文時代早期の竪穴建物内部には炉が無いということが、半ば常識として考えられ、いわゆる茅山式期に主体的に存在する炉穴をその代用と解釈することが一般的であった。これに対して小林達雄氏は、縄文時代「早期の竪穴住居跡において炉を有するものと炉の見あたらないものとは、炉の有無にかかわるものではなく、炉の痕跡（赤化現象）をよくとどめるか、とどめないかの差の違いであり、実際にはむしろ炉をもつことが一般的であったと見るべきであろう。すなわち早期の竪穴住居も通常は炉を設備していたのである」³⁶⁾と述べられている。ここで第二の問題が浮上してくる。研究史的には、縄文時代早期末葉からの屋内炉の普及とともに「炉穴は消滅したのであろう」³⁷⁾という戸沢充則氏をはじめとする伝統的な見解と、「煮沸としての機能＝調理の場とは別に竪穴住居内炉が構築されていたのであり、それは、火使用の用途分化と理解されるのである。すなわち、事実上は炉跡の機能そのものが多目的なものであり、竪穴住居内炉は、保温、保存という観点から、一部に構築されていたのであろう」³⁸⁾という山本暉久氏の見解が対立している。宇田川洋氏は、北海道の縄文時代中期の竪穴建物跡を集成し、その中で屋外炉の問題に触れている³⁹⁾。1983年、竪穴建物跡の建築史学的研究を一貫して試みてきた宮本長二郎氏は、縄文時代における屋内炉と屋外炉について極めて説得力のある見解を示されている。まず、北海道の竪穴建物跡には屋内炉を有するものが少なく、焼土遺構のような屋外炉で屋外炊飯をしていたと考えられること、関東地方出は縄文時代早期まで屋外炉が多いが、縄文時代早期終末以降に屋外炉が出現はじめても、遺跡出土の遺物量と竪穴建物跡の出現頻度のアンバランスから、「関東地方の場合も北海道と同様に、屋外炉が縄文時代早期末以降も継続して使われていたとみてよい」⁴⁰⁾とし、また、季節や気候に応じた屋内炉と屋外炉の使い分け、屋外炉での焼石料理の可能性、平地式建物と屋外炉との関係などを指摘されている。さらに、同氏は縄文時代から古墳時代までの火処である炉と竪について、その形式別・時期別の保有率や各地における数量的な検討を試み、縄文時代で最も普遍的な炉跡形態が地床炉であることを実証されている⁴¹⁾。今橋浩一氏は、関東地方の縄文時代中期中葉の阿玉台式期の竪穴建物跡が、屋内炉を持たないものがほとんどであることから、屋外炉や移動式の炉などを想定し、屋内炉の有無で竪穴建物跡の性格を論じるあり方に一石を投じられている⁴²⁾。同様な視点から、中野修秀氏が「炉の有無というのは、屋内調理（プライベート）・屋外炉（パブリック）の問題もあわせ、果たして集落内の各戸毎に調理を行っていたか否かの検討もして行かねばならない」⁴³⁾として、集石や屋外炉に対する注意喚起を促されている。小林達雄氏は炉の機能について、竪穴建物跡内には土器などがなく、日常的な煮炊きや食事が行われた形跡がほとんどないことから、縄文時代全般を通じて煮炊き料理は屋外で行われたとし、「屋内の炉を炊事用と考えたくなるが、実はそれを裏付けてくれる、いかなる証拠もない・・・炉即ち炊事用という図式は、考古学上の裏付けのないままに、いかにも現代的思考にあてはめていたにすぎなかったことを知らねばならない。・・・結果的には、炉は採暖・採光という二つの要素となってしまう。この二要素は、炉の設備とともに自ら約束された効果そのものであり、その効果は当然ながら竪穴住居内で発揮された」⁴⁴⁾と指摘され、さらに、炉のもう1つの機能として観念的側面を強調されている。最後に⑦の総合的な縄文時代の炉跡形態の分析については、目黒吉明氏による体系的な炉跡形態の分類と時空間的な特性の指摘、屋内炉の機能論的な考察が唯一である⁴⁵⁾。目黒氏の考察によって列島規模での炉跡の比較研究や系統論的アプローチなど、新しい課題に進むことが可能になったと言える。その後は小林達雄氏などが縄文時代の炉跡についての概説⁴⁶⁾を述べられている程度である。

以上、1930～1990年代前半の炉跡研究の回顧を終えるが、全体としては、当該研究は、①縄文時代中期の屋内炉に偏向していること、②地域的には東日本の遺跡を対象にしていること、③時間的、地域的な枠組

みを超えた系統論的研究は僅少であること、④80年代になると、縄文時代早・前期における炉跡研究が本格化し、機能論的研究に重点が置かれるようになること、⑤やはり80年代になって屋外炉への関心が高まり、「屋内炉＝調理施設」、「炉の有無が住居か否かの判断材料になる」などの言わば通説を批判することが始まること、以上の大きく5点に集約することができる。

炉跡研究の第4期は、1990年代後半から現在に至るまでの期間で、東北・北陸・関東地方における複式炉の形態変化と時期的変遷および分布論的な考察などが比較的盛んに論議されている。また、1990年代後半以降における縄文時代の集落研究では、竪穴建物の上屋構造の解明、集落分析、集落構造の復元などを進めていく上での作業指標として、縄文時代の竪穴建物跡を型式的に把握していくという研究が深められていく。その流れの中で小栗一夫氏は「住居型式」を設定するための基礎作業として、「肉眼でも特徴を捉えやすく、住居跡の型式認定を行うにあたっては不可欠であると同時に極めて有効な判断材料」³⁷⁾である炉跡に焦点をあてられ、宇津木台地区考古学研究会・縄文中期集落研究グループが1995年に実施されたシンポジウムの資料集³⁸⁾を基にして、多摩丘陵・武蔵野台地における縄文時代中期の炉跡について分類されている。氏は炉跡の形態によって、地床炉、埋燗炉、添石炉、石囲炉、石囲埋燗炉、土器片炉の6形態に大別し、さらに14形態に細別されている。1995年、加納実氏による加曾利EⅢ式期に認められる「複構造の炉跡」と中山俊之氏による「斜土器埋設炉」の設定³⁹⁾、1997年、加納氏の考察を発展させた渡辺新氏による「複構造炉」の提唱⁴⁰⁾、1998年、小倉和重氏による斜土器埋設炉についての集成と分類⁴¹⁾など、1990年代後半は複式炉研究、住居型式研究、集落研究と関連させた個別研究が進められていく。また、三上徹也氏は焼土が土器の内側にあって外側にはほとんど見られない埋燗炉と、外側に焼土が顕著に認められる埋燗炉を区別し、石囲埋燗炉についても土器と石囲の空間のあり方から細分されている⁴²⁾。2000年代前半になると、渡邊千尋氏による縄文時代中期の炉形態の変遷についての論考⁴³⁾をはじめ、茨城県における縄文時代の炉跡研究として、荒蒔克一郎氏による茨城町宮後遺跡における縄文時代中期の炉跡形態の研究⁴⁴⁾、鈴木素行氏ほかによる茨城県域の縄文時代中期後葉の屋内炉の集成・分類⁴⁵⁾、亀井翼氏による炉体土器の使用痕跡研究⁴⁶⁾などがあり、いずれの研究も縄文時代中期の屋内炉の形態論、用途論、変遷過程などに言及したものである。2010年、磯部裕史氏は、これまでの縄文時代の屋内炉研究を振り返り、研究の方向性を総括し、今後の視点などについて私見を述べられている⁴⁷⁾。氏は従来の屋内炉の研究史について、1920年代後半～1930年代（「屋内炉の存在と形態バリエーションの認識」）、1940年代～1960年代（「住居型式研究・集落研究・共同体論にみる屋内炉」）、1970年代～1990年代（「編年研究と機能論的検討」）、1990年代～2000年代（「炉形態評価を伴う形態分類案」）と総括されている。研究の方向性については、①「編年的な理解」、②「住居・集落研究」、③「機能的な側面」に分けられている。また、氏が目指される研究の方向性は②であり、「住居研究・集落研究を意識した屋内炉研究に着手し、住居型式研究を視野に入れた屋内炉の形態分類、すなわち型式的な理解に基づく分類が必要である」主張されている。さらに、抜き取り痕跡の指摘意義を再確認し、「屋内炉の形成過程モデル」を想定されている。その中で炉の形成過程の各段階として、「構築段階・使用段階・廃絶段階」の3つの段階を明確に識別すること、「型式的な理解を目的とする形態分類においては、構築段階の属性のみを扱う必要がある」と述べられている。抜き取り痕跡については、「その背景に存在する『行為段階』の多様性を意識して、事例に応じた解釈を示すことが重要」であり、屋内炉の「形態分類におけるその扱いの重要性」を指摘されている。具体的には多摩ニュータウン遺跡群における縄文時代中期の屋内炉を例に、屋内炉の形成過程の把握・解釈と炉形態の判断・説明をなされている。まず、屋内炉の構築段階の炉形態として「石囲炉」、「三方石囲炉」、「埋燗炉」、「密接型石囲埋燗炉」、「右間型石囲埋燗炉」、「石敷

き炉」を認め、また、それらの廃絶段階の炉形態としては「地床炉」、「三方石囲炉」、「添石炉」、「埋燵炉」、「有間型添石埋燵炉」、「有間型三方石囲埋燵炉」、「石囲土器片敷き炉」などへの形態変化を認められている。残念ながら、氏の「炉形態の定義は、紙数の関係上、その詳細を割愛」されており、詳細を知ることができないが、筆者も炉の形成論的な視点は、屋内炉研究の基礎分析に必須な重要な手続きであると考えている。

以上、縄文時代の炉跡研究について1920年代以降から現在に至るまでの研究軌跡を回顧してきたが、ここで、当該研究の大きな潮流と今後の課題などについて簡単にまとめておく。前述の通り、磯部氏は縄文時代の屋内炉研究について、①「編年的な理解」、②「住居・集落研究」、③「機能的な側面」の3つの系統・分野に分けられているが、筆者が縄文時代の炉跡研究を回顧した結果、①形態論的研究（時期・地域別形態変遷の究明）、②機能・用途論的研究（実用的側面・観念的側面の究明）、③形成論的研究（構築～廃絶過程及び形態変化の究明）、④住居型式・集落研究（集落論的・社会論的なアプローチ）の4つの系統・分野に分けられる。また、それぞれの研究は独立的ではなく、相互に関連しながら進められてきたと言える。なお、複式炉はその分布地域毎に詳しく考察され、2005年には広域的なシンポジウムも開催されている。この複式炉に関する研究は、1990年代以降に盛んとなる住居型式・集落研究などに絡めた屋内炉研究とともに、現在に至っても盛んに議論が交わされる屋内炉研究の主要分野に位置づけられる。

また、次項で詳しく触れるが、2005年の鈴木素行氏ほかによる炉の単独形態と複合形態の視点、2008年の亀井氏による炉体土器の使用痕跡の視点、2010年の磯部氏による炉の形成過程の視点は、炉石などの抜き取り痕跡、重複、改変、併設の痕跡などに着目した形成論的研究であり、これからの縄文時代の炉跡研究を深化させていく可能性を秘めている。それは従前の炉跡研究にありがちだった一元的かつ概念的な形態分類に基づく諸研究に対して、微視的な研究でありながらも、炉の実態解明につながる実証的な研究であり、調査精度に左右されがちな炉跡について、観察・判断・記録の精度を高め、復元的かつ実態的な形態分類を築いていこうとする今日的なアプローチの1つであると考えている。これまでの炉跡研究は、系統性のある重層的な研究であったと必ずしも言えないが、約1世紀にわたって考察・議論されてきたことは事実であり、優れた炉跡研究も数多く存在している。今後も研究の系統性にこだわることなく、研究者の自由な発想と明確な研究のねらいをもって、特に縄文時代の各研究と横断的な議論を重ねながら、縄文時代集落・社会のあり方を解明するための研究分野であり続けることを強く期待したい。

5 茨城県域における縄文時代中期の炉跡研究について

前項で紹介した通り、2000年度以降、茨城県域における縄文時代の炉跡研究の代表的なものとして、荒崎克一郎氏による茨城町宮後遺跡における縄文時代中期の炉跡形態分析、鈴木素行氏ほかによる茨城県域の縄文時代中期後葉の屋内炉の集成・分類、亀井翼氏による炉体土器の使用痕跡研究などがある。以下、それらの炉跡形態の分類を簡単に整理しておきたい。

○ 荒崎克一郎「茨城町宮後遺跡における縄文時代中期竪穴住居跡の形態－炉跡の形態を中心として－」『研究ノート』11号 財団法人茨城県教育財団 2002年

氏は、茨城町宮後遺跡で確認された縄文時代中期の土器埋設炉について、先行研究の分類を参考に以下のように分類されている。

Ma類：土器の口縁部と底部を欠き胴部を利用しているもの

1種：炉床面が土器の周囲にあるもの

2種：炉床面が土器の内部にあるもの

Mb類：土器の胴部下半を欠き口縁部から胴部を利用しているもの

1種：炉床面が土器の周囲にあるもの

2種：炉床面が土器の内部にあるもの

Mc類：その他の形状を示した土器を用いているもの

この分類を基に宮後遺跡で確認できたMa類とMb類との間に時間的な傾向は認められないこと、Mc類は確認できなかったと述べられている。また、炉床面の位置による分類である1種か2種かの違いについては、時間的な変化が認められ、加曽利EⅠ式新段階以前が1種、加曽利EⅢ式古段階以降が2種という図式が看取でき、この変化は土器埋設炉の機能に何らかの変化があったと推測できると述べられている。

また、加曽利EⅡ式以前の土器埋設炉は、煮沸用の深鉢などを安定して据えるための「ささえ」、加曽利EⅢ式古段階以降の土器埋設炉は、埋設土器の内部に炉床面を有することから、土器片囲炉の土器片のような炉の「構築材」と想定されている。さらに氏は、炉床面の位置による分類である1種か2種かの違いについて、他遺跡の事例から、その画期が加曽利EⅡ式期に求められるであろうと推測されている。

- 鈴木素行ほか「茨城県における縄文時代中期後葉の屋内炉」『日本考古学協会 2005 年度福島大会シンポジウム資料集』日本考古学協会 2005 年度福島大会実行委員会 2005 年

氏はほか、縄文時代中期後葉の屋内炉について、その単純形態として「石組炉（石囲炉）」、「土器片組炉（土器片囲炉）」、「土器埋設炉（埋壺炉）」、「地床炉」の4つに分類されている。また、炉の複合形態という視点と単純形態の炉の複合を積極的に認める立場から、「地床炉・地床炉」、「石組炉・地床炉」、「土器片組炉・地床炉」、「石組炉・土器埋設炉」、「土器片組炉・土器埋設炉」、「地床炉・土器埋設炉」、「石組炉・石組炉」、「土器埋設炉・土器埋設炉」の8つに分類されている。炉の単純形態としての「石組炉（石囲炉）」は、炉石の数は炉石の抜きの有無によって変化するという視点から細別されていない。また、内部の面積が土器埋設炉と同規模のものについては「小型石組炉」として区別されている。「土器片組炉（土器片囲炉）」は、石組炉の炉石を土器片に置換した形態で、土器片の数は土器片の抜きの有無によって変化するという視点から細別されていない。また、内部の面積が土器埋設炉と同規模のものについては「小型土器片組炉」として区別されている。「土器埋設炉（埋壺炉）」は、土器がその大きさに対応する掘り方に埋設され、土器内部を炉床面とするものとされている。「地床炉」は、「炉床を包囲する装置を持たない炉」で、炉内の掻き出しの有無によって掘り込みの深さに相違が生じると述べられている。また、炉床面の面積が土器埋設炉と同規模のものについては「小型地床炉」として区別されている。炉の複合形態は、1種の堅穴建物跡から複数の炉跡が確認できる場合があり、この現象は「単純形態の炉の痕跡の累積と、単純形態の炉が組み合う併設」を含み、この「併設に限定して炉の複合形態と呼びたい」と述べられている。また、複合形態の炉として「石組炉・土器埋設炉」と「石組炉・石組炉」の併設と捉えられるものが「複式炉」に相当するとされている。さらに、地域区分としては「久慈川流域以北の北部、那珂川流域を中心とし、古鬼怒川流域を中心とした南部」の3地域に区分し、屋内炉のあり方の特徴を指摘されている。まず、北部における縄文時代中期後葉から後期前葉の屋内炉は、中期後葉を通じて石組炉が優勢であり、「石材に比較恵まれた地域の特徴」を認められている。土器埋設炉と土器片組炉はほとんど見られない一方で、石組炉・土器埋設炉、地床炉・土器埋設炉の組合せが、加曽利EⅡ・Ⅲ式期に比較的多く認められるという。次に、中部における縄文時代中期後葉の屋内炉は、加曽利EⅠ～Ⅳ式の宮後遺跡の例では、地床炉が過半数を超え、次いで石組炉となる。加曽利EⅣ式期になると地床炉の割合が増加し、石組炉は見られなくなる。また、加曽利EⅢ・Ⅳ式の砂川遺跡の例では、宮後遺跡とは異なり、地床炉の割合が減り、石組炉の割

合が増えている。石組炉は方形で比較的大きな竈を使用していることが特徴と述べられている。最後に、南部における縄文時代中期後葉から後期前葉の屋内炉の地域性は、「石組炉の希少さと土器片組炉の存在によって抽出」され、「量的には単純形態の地床炉が過半数を占める。次に多いのは土器埋設炉」である。前田村遺跡の例では、「土器埋設炉の複合形態は、加曾利E式期をピークに中峙式並行期から加曾利EⅢ式期に確認できる。一方、単純形態の土器埋設炉は、中峙式並行期～加曾利EⅠ式期に集中し、加曾利EⅢ～Ⅳ式期になると土器埋設自体が減少する」。また、目黒吉明氏が分類された複式炉に該当する屋内炉として、北部の上の代遺跡第1・21・23号竈穴建物跡、中部の金洗沢遺跡第1号竈穴建物跡、三反田規塚遺跡第9号竈穴建物跡、南部の前田村遺跡第323・327号竈穴建物跡の該当し、三反田遺跡例が加曾利EⅣ式期の「石組複式炉」、その他が加曾利EⅡ・Ⅲ式期の「土器埋設複式炉」であり、「茨城県域では、北部が石組炉、中・南部が地床炉を典型としながら、他の単純形態の炉、複合形態の炉を組成する」とし、「単純形態の土器埋設炉には、その炉床の形成位置から、土器を据えおいて使用した煮沸調理施設を推定することは難しい。むしろ、異なる機能を考えることで、他の単純形態の炉との複合が理解」できるといふ。さらに、「単純形態の土器埋設炉、これと同規模の石組炉、土器片組炉、地床炉のみが付属する住居跡を、炉跡が検出されない住居跡とともに、煮沸調理施設の炉を付属しない住居と捉え」、「集落を構成する住居の機能差と住み分けという課題」を指摘されている。

○ 亀井翼「炉体土器の使用痕跡研究」『筑波大学 先史学・考古学研究』第19号 2008年

氏は、土器埋設炉の掘り方形状、炉体土器への転用部位、炉体土器の埋設位置などから、以下のように分類されている。「炉体土器に比して、炉の掘り方が土器の径とほぼ同じであるものと、炉の掘り方のほうが大きく、土器と掘り方の立ち上がり空間を有するものとに分け、前者をⅠ類、後者をⅡ類とし、Ⅰ類のなかで特に掘り方がだるま形（瓢箪形）を呈するものをⅢ類とする。また、炉体土器の使用部位をa口縁部～胴部、b胴部、c胴部～底部に3分する。さらにⅡ類において炉体土器が炉の中央に埋設されるものを1、炉辺に偏在するものを2とする。Ⅰ類では中央に、Ⅲ類ではだるま形の「頭」か「胴」に偏って埋設されるため、特に土器の埋設場所をもって1、2と区別はしない。石囲埋焼炉、土器片囲埋焼炉（今回の分析対象にはなかった）の場合は、分類名の頭にそれぞれS、Pを付し、炉体土器が斜位に埋設される場合であればさらにLを付す」。

氏の研究は、屋内炉の機能・用途論の基礎研究として、炉体土器に残された使用痕跡が何であるのかの究明を目的とされている。また、上記の土器埋設炉の形態であるⅠ類で用いる土器の部位は胴部で内径の大きいものを利用する傾向があり、Ⅱ・Ⅲ類で用いる土器の部位は口縁～胴部を利用する傾向があることを指摘されている。また、土器表面の赤化が加熱の方向を示すならば、Ⅰ類は炉体土器内での燃焼、Ⅱ類は炉体土器外での燃焼を示していると推定されている。詳細な炉体土器の使用痕跡の分析を基に、土器埋設炉に認められる形態変化が炉体土器自体の機能・用途の相違によるものである可能性を導き出されている点は、これまでに固定しつつあった屋内炉の形態分類について、細分の方向性を具体的に示されたと言える。

6 茨城県域における縄文時代中期の屋内炉について

以下では2024年の集積結果の分析と考察を行い、茨城県域における縄文時代中期の屋内炉について、時期・地域毎の形態的特徴を明らかにしたい。

1) 地域区分について

① 県北地域（久慈川以北）

- ② 県央地域（酒沼川水系・郡河川以南）
 - ③ 県東地域（北浦水系）
 - ④ 県南地域（小貝川下流・霞ヶ浦水系）
 - ⑤ 筑波山系地域（筑波山系丘陵部）
 - ⑥ 県西地域（利根川・鬼怒川・小貝川中流）
- 2) 時期区分について
- ① 中期前葉：阿玉台Ⅰa・Ⅰb・Ⅱ式
 - ② 中期中葉：阿玉台Ⅲ・Ⅳ式・中峠式・加曾利EⅠ式
 - ③ 中期後葉：加曾利EⅡ・Ⅲ式
 - ④ 中期末葉：加曾利EⅣ・Ⅴ式（称名寺Ⅰ式併行）
- 3) 屋内炉形態について
- ① 地床炉（深さ：0～20cm、21～40cm、41cm～）
 - ② 土器埋設炉
 - Ⅰ類（炉床面が埋設土器の外まで広がるタイプ）
 - Ⅱ類（炉床面が埋設土器の内で完結するタイプ）
 埋設土器：単独、複数
 - ③ 石囲炉（小形礫、楕円形基調の囲繞、炉石の数・配置方法のバリエーション）

囲繞：一部開口、全周 ※炉石の残存状況と抜き取り痕などから判断

埋設土器：有、無
 - ④ 土器片囲炉（土器片、楕円形基調の囲繞、土器片の数・配置方法のバリエーション）

囲繞：一部開口、全周 ※土器片の残存状況と抜き取り痕などから判断

埋設土器：有、無
 - ⑤ 石・土器片囲炉（土器片、小形礫、楕円形基調の囲繞、土器片・炉石の数・配置方法のバリエーション）

囲繞：一部開口、全周 ※土器片・炉石の残存状況と抜き取り痕などから判断

埋設土器：有、無
 - ⑥ 石組炉（大形礫、方形基調の囲繞）
 - ⑦ 複式構造炉⁴⁸⁾

目黒吉明氏分類の複式炉との関連性が想定される複式構造の炉跡

つくばみらい市前田村遺跡第347号竪穴建物跡の事例
 - ⑧ 複式炉

鈴木氏ほかによれば、日立市上の代遺跡（第1号竪穴建物跡）、上の内遺跡（第21・23号竪穴建物跡）、那珂市金洗沢遺跡（第1号竪穴建物跡）、ひたちなか市三反田規塚遺跡（第9号竪穴建物跡）、つくばみらい市前田村遺跡（第323・327号竪穴建物跡）の各事例が目黒吉明氏分類の複式炉に該当するとされている⁴⁹⁾。
- 4) 地域区分毎の屋内炉の形態変化について
- ① 県北地域について

集成した遺跡数は、日立市根岸西遺跡、十王堂遺跡の2か所である。根岸西遺跡で屋内炉を確認できた竪穴建物跡は加曾利EⅣ式期の3棟（第1・5・10号）で、いずれも石組炉である。第1号竪穴建物

跡の事例は炉床から深鉢片が出土し、第5号竪穴建物跡の事例はコの字（三方）石組炉で炉石の抜き取りが認められる。十王堂遺跡で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は8棟で、加曾利EⅡ式期が1棟（第14号）、加曾利EⅢ式期が1棟（第7号）、加曾利EⅣ式期が4棟（第15・26・27・29号）、その他に中期後葉が2棟（第8・28号）である。加曾利EⅡ式期の第14号竪穴建物跡と加曾利EⅢ式期の第7号竪穴建物跡の事例はどちらも石組炉に類似する石囲炉である。加曾利EⅣ式期の第15・26・27・29号竪穴建物跡の事例はそれぞれ地床炉・土器埋設炉（Ⅱ類）・石囲炉・石組炉1基である。中期後葉の竪穴建物跡の事例は地床炉1基、石組炉に類似する石囲炉1基である。

鈴木氏はほかによれば、北部における縄文時代中期後葉から後期前葉の屋内炉は、中期後葉を通じて石組炉が優勢であり、土器埋設炉と土器片組炉はほとんど見られない一方で、「石組炉・土器埋設炉、地床炉・土器埋設炉の組合せが、加曾利EⅡ・Ⅲ式期に比較的多く認められると指摘されている³⁰⁾。筆者らによる集成結果からも、県北地域においては加曾利EⅡ・Ⅲ式期における（石組炉に類似する）石囲炉、加曾利EⅣ式期の石組炉の優勢が認められる。鈴木氏はほかがすでに指摘されているように、凝灰質泥岩などの石材が豊富に存在している地域の特徴を反映していると考えられる。なお、加曾利EⅣ式期の十王堂遺跡第26号竪穴建物跡は、県北地域では低調な土器埋設炉（Ⅱ類）であり、口縁部・底部を欠く深鉢を埋設している。

② 県東地域について

集成した遺跡数は、鹿嶋市御園生遺跡、潮来市坊内貝塚、清水原山遺跡、鉾田市吉十北遺跡の4か所である。御園生遺跡で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は4棟で、加曾利EⅢ式期が2棟（第17・34号）、加曾利EⅣ式期が1棟（第59A号）、その他に中期後葉が1棟（第42号）である。中期後葉の第42号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅰ類）で、その他はいずれも地床炉である。坊内貝塚で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は、中期後葉の1棟（第1号）で、地床炉である。吉十北遺跡で屋内炉を確認した竪穴建物跡は28棟で、阿玉台Ⅲ式期が2棟（第11・1B号）、阿玉台Ⅳ式期が6棟（第1A・16・18・21・23・30号）、加曾利EⅠ式期が13棟（第4・5・7・9・12・13・19・20・28・32・33・35・36号）、加曾利EⅡ式期が2棟（第22・24号）、加曾利EⅢ式期が5棟（第2・15・26・29・34号）である。阿玉台Ⅲ式期の第11号竪穴建物跡の事例は地床炉、第1B号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅰ類）、阿玉台Ⅳ式期の第16・18号竪穴建物跡の事例がどちらも石囲炉、第1A・18・23・30号竪穴建物跡の事例はいずれも地床炉、第21号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅰ類）である。加曾利EⅠ式期の第9号竪穴建物跡の事例は石囲炉（地床炉から石囲炉へ改変）、その他はいずれも地床炉である。加曾利EⅡ式期の第22号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅰ類）で土器を斜めに埋設している。第24号竪穴建物跡の事例は地床炉である。加曾利EⅢ式期の第29号竪穴建物跡の事例は石囲炉、第34号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅱ類、地床炉から土器埋設炉へ改変）、その他はいずれも地床炉である。清水原山遺跡で屋内炉を確認できた竪穴建物跡は8棟である。加曾利EⅣ式期が7棟（第1・2・3・4・6・8・11号）、その他に中期後葉が1棟（第7号）で、いずれも地床炉である。

県東地域における縄文時代中期の屋内炉は、中期中葉～後葉まで地床炉が優勢であり、次いで土器埋設炉（Ⅰ類：阿玉台Ⅲ式期～加曾利EⅡ式期、Ⅱ類：加曾利EⅢ式期）と石囲炉（阿玉台Ⅳ式期～加曾利EⅢ式期）となっている。当該地域では地床炉が優勢であり、県北地域と同様に土器片囲炉は低調である。なお、加曾利EⅠ式期の第9号竪穴建物跡の事例では地床炉から石囲炉へ、加曾利EⅢ式期の第34号竪穴建物跡の事例では地床炉から土器埋設炉（Ⅱ類）への改変が認められる点は注意が

必要である。構築段階の炉形態を改変するということは、それまでの炉と同じような機能を維持するというよりは、機能強化を図りながら何らかの要素が付加されたと考えられる。この点に関して鈴木氏は、「単純形態の土器埋設炉には、その炉床の形成位置から、土器を握えおいて使用した煮沸調理施設を推定することは難しい。むしろ、異なる機能を考えることで、他の単純形態の炉との複合が理解」できるとし、さらに、「単純形態の土器埋設炉、これと同規模の石組炉、土器片組炉、地床炉のみが付属する住居跡を、炉跡が検出されない住居跡とともに、煮沸調理施設の炉を付属しない住居と捉え」、「集落を構成する住居の機能差と住み分け」⁹¹⁾の可能性を指摘されている。

③ 県西地域について

集成した遺跡数は、古河市釈迦才伝遺跡、五霞町釈迦新田遺跡、上原遺跡、坂東市駒寄遺跡、然山西遺跡、馬立原遺跡、境町山崎遺跡群の7か所である。釈迦才伝遺跡で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は6棟で、加曾利EⅢ式期が4棟（第1・2・24A・28号）、加曾利EⅣ式期が2棟（第20・23号）、である。加曾利EⅢ式期の第1・2・28号竪穴建物跡の事例はいずれも土器埋設炉（Ⅱ類）、第24A号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅰ類、埋設土器2点）、第28号竪穴建物跡の事例は地床炉と土器埋設炉（Ⅱ類）を併設している。加曾利EⅣ式期の第20・23号竪穴建物跡の事例はどちらも地床炉である。釈迦新田遺跡で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は、加曾利EⅡ式期が1棟（第2号）と中期後葉が1棟（第1号）である。加曾利EⅡ式期の第2号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅱ類、埋設土器3点、入れ子状）である。中期後葉の第1号竪穴建物跡の事例は地床炉である。上原遺跡で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は2棟である。どちらも加曾利EⅢ式期で、地床炉である。駒寄遺跡で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は阿玉台Ⅳ式期の1棟（第1号）で、地床炉である。然山西遺跡で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は2棟である。加曾利EⅣ式期が1棟（第11号）、中期後葉が1棟（第8号）で、どちらも地床炉である。馬立原遺跡で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は加曾利EⅢ式期の1棟（第1号）で、地床炉である。山崎遺跡群で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は加曾利EⅢ式期の1棟（第5号）で、土器片囲炉（曾利系土器利用）である。

県西地域における縄文時代中期の屋内炉は、県東地域と同様に、中期中葉～後葉まで地床炉が優勢であり、次いで土器埋設炉（Ⅰ類：加曾利EⅢ式期、Ⅱ類：加曾利EⅡ・Ⅲ式期）となっている。土器片囲炉は低調で石囲炉はほとんど認められない。土器片囲炉は山崎遺跡群の第5号竪穴建物跡で唯一確認できた。なお、釈迦新田遺跡の第2号竪穴建物跡の事例については、炉体土器の大きさとして入れ子状に3点の深鉢を埋設しているため、一見すると土器片囲炉に含めてしまいそうなやや特殊な形態である。釈迦才伝遺跡の第28号竪穴建物跡の事例では、地床炉と土器埋設炉（Ⅱ類）の併設と判断しているが、県東地域の吉北遺跡の第9・34号竪穴建物跡で確認できた地床炉から土器埋設炉と石囲炉などへの改変の可能性も否定できない。

④ 筑波山系地域について

集成した遺跡数は、桜川市裏山遺跡、北田遺跡、松田古墳群、山ノ入古墳群の4か所である。裏山遺跡で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は加曾利EⅣ式期の2棟（第15・38号）で、どちらも地床炉である。北田遺跡で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は5棟で、加曾利EⅠ式期が1棟（第8号）、加曾利EⅢ式期が2棟（第26・29号）、加曾利EⅣ式期が2棟（第14・23号）である。加曾利EⅠ式期の第8号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅱ類）である。加曾利EⅢ式期の第26・29号竪穴建物跡の事例はどちらも石組炉で、特に第29号竪穴建物跡の事例では炉床から土器片が出土している。加曾利EⅣ式期の

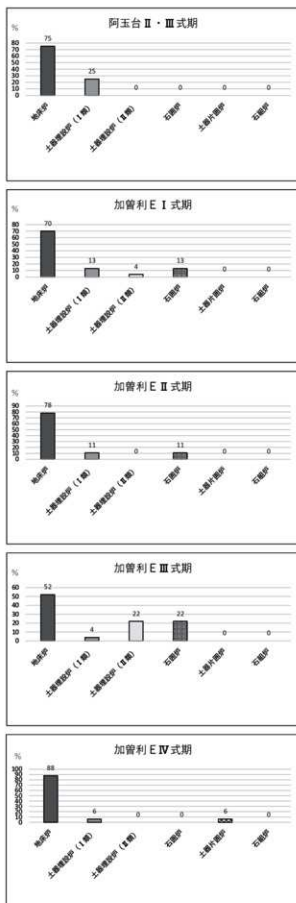
第14号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅰ類、埋設土器2点）、第23号竪穴建物跡の事例は石囲炉（埋設土器を含む）である。松田古墳群で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は4棟で、阿玉台Ⅱ式期が1棟（第16号）、加曾利EⅣ式期が3棟（20・38・45）である。阿玉台Ⅱ式期の第16号竪穴建物跡の事例は地床炉（礎1点を含む）である。加曾利EⅣ式期の第20・45号竪穴建物跡の事例はどちらも地床炉で、第20号竪穴建物跡の地床炉の底面から焼けた礫が出土していることから、本来は石囲炉の可能性がある。第38号竪穴建物跡の事例は扁平な花崗岩礫を利用した石組炉である。山ノ入古墳群で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は加曾利EⅡ式期の2棟（第3・8号）で、どちらも地床炉である。

筑波山系地域における縄文時代中期の屋内炉は、中期前葉～後葉まで地床炉が優勢ではあるが、少数ながら土器埋設炉（Ⅰ類：加曾利EⅣ式期、Ⅱ類：加曾利EⅠ式期）と石囲炉が認められ、また、加曾利EⅢ・Ⅳ式期になると石組炉の数が増える傾向を指摘できる。土器片囲炉は低調である。土器埋設炉における複数土器の埋設と石囲炉への埋設土器の付加など、炉の複合形態としてやや複雑な状況が認められる。石組炉については県北・県央地域において認められる形態と類似するものが多く、大形の礫や加工しやすい石材が集落の近隣で産出する地域では、炉の規模が比較的大きく、利用する炉石の数量が少ない石組炉（広義の石囲炉）の形態を採用することが多いと考えられる。筑波山系地域は県南・県西地域に隣接しながらも、局地的に筑波山周辺で産出する花崗岩と片岩などを利用した大型の石囲炉や石組炉が採用されており、県北・中央地域と同様に石材確保が容易であるという地域の特徴を見いだすことができる。

⑤ 県央地域について

集成した遺跡数は、水戸市砂川遺跡、十万原遺跡、堀町西古墳、城里町後遺跡、茨城町宮後遺跡、大洗町千天遺跡、笠間市橋爪遺跡、ひたちなか市宮後遺跡の8か所である。砂川遺跡と茨城町宮後遺跡以外の遺跡からは屋内炉をもつ竪穴建物跡が1・2棟しか確認できていないため、主要な分析は砂川遺跡と茨城町宮後遺跡で行うことになるが、十万原遺跡で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は加曾利EⅢ式期の1棟（第42号）で、石囲炉である。堀町西古墳で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は加曾利EⅠ式期の1棟（第7号）で、土器埋設炉（Ⅱ類）である。後遺跡で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は加曾利EⅡ式期の1棟（第8号）で、土器埋設炉（Ⅱ類）である。千天遺跡で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は中期後葉の2棟（第24・25号）で地床炉である。橋爪遺跡で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は加曾利EⅢ式期の1棟（第1号）で、石囲炉である。ひたちなか市宮後遺跡屋内炉が確認できた竪穴建物跡は加曾利EⅣ式期の1棟（第22号）で、地床炉である。砂川遺跡で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は18棟で、いずれも加曾利EⅣ式期である。第13・14・15・19・23・25・33・36・41・42号竪穴建物跡の事例はいずれも地床炉（添石1点を有するもの2基を含む）、第30・40・44号竪穴建物跡の事例はいずれも土器埋設炉（Ⅱ類、添石1点を有するもの1基を含む）、第43号竪穴建物跡の事例は石囲炉、第16・18・22・24号竪穴建物跡の事例は石組炉（粘板岩1、凝灰岩2、砂岩1）である。砂川遺跡の場合、数の多い方から地床炉、石組炉、土器埋設炉（Ⅱ類）、石囲炉となっている。茨城町宮後遺跡で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は78棟で、阿玉台Ⅱ式期が1棟（第51号）、阿玉台Ⅲ式期が3棟（第151・244・245号）、加曾利EⅠ式期が21棟（第5・7・12・15・19・21・24・28・41・53・147・153・156・159・160・165・167・168・172・217・236号）、加曾利EⅡ式期が9棟（第6・10・13・42・152・157・181・182・233号）、加曾利EⅢ式期が22棟（第2・20・30・48・52・77・138・140・141・142・145・154・164・170・174・193・203・212・214・219・224・246号）、加曾利EⅣ式期が

16 棟（第 70・76・78・79・108・109・119・120・149・163・184・194・196・206・222・241 号）、中期中葉が 1 棟（第 162 号）、中期後葉が 1 棟（第 11 号）、中期後半が 3 棟（第 18・211・239）、中期が 1 棟（第 39 号）である。阿玉台Ⅱ式期の第 51 号竪穴建物跡の事例は地床炉で、阿玉台Ⅲ式期の第 151 号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅰ類）、第 244・245 号竪穴建物跡の事例はどちらも地床炉である。加曾利 EⅠ式期の第 5・7・12・15・21・24・28・41・53・147・153・159・160・167・168・172 号竪穴建物跡の事例はいずれも地床炉、第 19・165・217・236 号竪穴建物跡の事例はいずれも土器埋設炉（Ⅰ類：第 19・217・236 号、Ⅱ類：第 165 号）、第 5・156・167 号竪穴建物跡の事例はいずれも石囲炉である。なお、第 5・167 号竪穴建物跡の事例は地床炉と石囲炉を併設と考えられる。県西地域の釈迦才仏遺跡の第 28 号竪穴建物跡でも地床炉と土器埋設炉（Ⅱ類）の併設と判断されているが、県東地域の吉十北遺跡の第 9・34 号竪穴建物跡で確認できた地床炉から土器埋設炉と石囲炉などへの改変の可能性も否定できない。加曾利 EⅡ式期の第 6・10・13・42・181・182・233 号竪穴建物跡の事例はいずれも地床炉、第 152 号竪穴建物跡の事例は石囲炉、第 157 号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅰ類）である。加曾利 EⅢ式期の第 2・52・77・138・140・141・142・164・193・203・214・224 号竪穴建物跡の事例はいずれも地床炉、第 20・48・174・203・212・219 号竪穴建物跡の事例はいずれも土器埋設炉（Ⅰ類：第 219 号、Ⅱ類：第 20・48・174・203・212 号）、第 30・77・145・154・170 号竪穴建物跡の事例はいずれも石囲炉である。なお、第 77 号竪穴建物跡の事例は地床炉と石囲炉の重複と考えられる。加曾利 EⅣ式期の第 76・78・79・108・109・



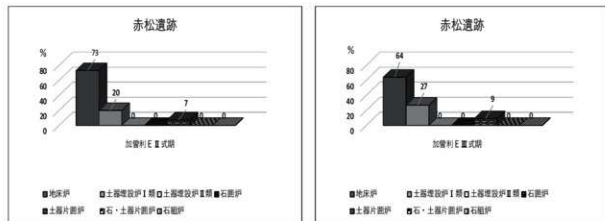
グラフ① 茨城町宮後遺跡における時期別・形態別屋内炉の割合

119・120・163・184・194・196・206・222・241 号竪穴建物跡の事例はいずれも地床炉、第 70 号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉(Ⅱ類)、第 149 号竪穴建物跡の事例は土器片囲炉である。その他に中期中葉・中期後葉・中期の第 11・18・39・162・211・239 号竪穴建物跡の事例はいずれも地床炉である。

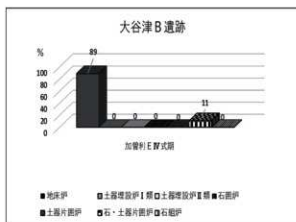
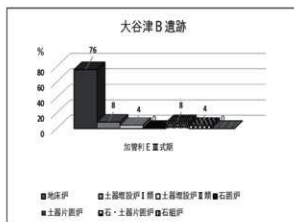
県央地域における縄文時代中期の屋内炉は、中期中葉～後葉まで地床炉が優勢であり、次いで土器埋設炉(Ⅰ類：阿玉台Ⅲ式期～加曽利 EⅡ式期、Ⅱ類：加曽利 EⅢ式期)と石囲炉(加曽利 EⅠ～Ⅲ式期)となっている。当該地域では地床炉がやや優勢であり、加曽利 EⅣ式期になると石囲炉が低調となり、僅かに土器片囲炉が認められる。鈴木氏ほかによれば、「中部における縄文時代中期後葉の屋内炉は、加曽利 EⅠ～Ⅳ式期の宮後遺跡の例では、地床炉が過半数を超え、次いで石組炉となっている。加曽利 EⅣ式期になると地床炉の割合が増加し、石組炉は見られなくなる。また、加曽利 EⅢ・Ⅳ式期の砂川遺跡の例では、宮後遺跡とは異なり、地床炉の割合が減り、石組炉の割合が増えている。石組炉は方形で比較的大きな礎を使用していることが特徴である」³⁰⁾とまとめられており、筆者の分析とも大まかには一致している。県北地域との大きな相違は、加曽利 EⅣ式期になると石囲炉が低調になること、石組炉は認められないことである。さらに、土器片囲炉は県北・県東・県西・筑波山系地域とはほぼ同様で加曽利 EⅣ式期に僅かに認められる程度であり、後述する県南地域との一つの相違と考えられる。

⑥ 県南地域について

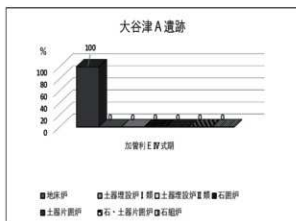
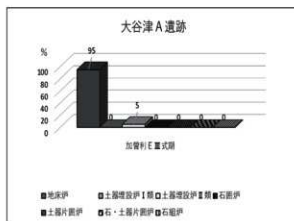
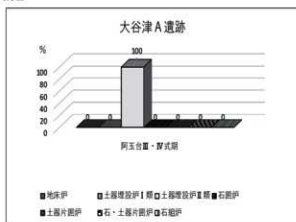
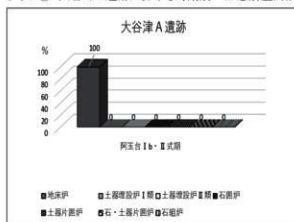
集めた遺跡数は、龍ヶ崎市赤松遺跡(29 例)、打越 A 遺(1 例)、廻地 A 遺跡(7 例)、仲根台 B 遺跡(4 例)、南三島遺跡(222 例)、つくばみらい市大谷津 B 遺跡(48 例)、大谷津 A 遺跡(30 例)、筒戸 A・B 遺跡(62 例)、前田村遺跡(236 例)、取手市下高井向原遺跡(1 例)、柏原遺跡(2 例)、つくば市大境遺跡(2 例)、境松遺跡(24 例)、神谷森遺跡(15 例)、高崎貝塚(9 例)、日枝西遺跡(3 例)、中台遺跡(11 例)、中原遺跡(1 例)、上野陣場遺跡(1 例)、上野古屋敷遺跡(1 例)、金田西坪 B 遺跡(2 例)、鳥名ツバタ遺跡(2 例)、鳥名前野東遺跡(2 例)、鳥名境松遺跡(31 例)、下河原崎谷中台遺跡(1 例)、手代木田向西遺跡(2 例)、志筑遺跡(1 例)、土浦市下広岡遺跡(31 例)、宮前遺跡(35 例)、稲敷市児松遺跡(3 例)、美浦村大谷貝塚(12 例)、阿見町牛頭座南遺跡(8 例)、石岡市三村城跡(1 例)、猫松遺跡(1 例)、中津川遺跡(8 例)、横堀遺跡(3 例)、東田中遺跡(4 例)、小美玉市石川遺跡(5 例)、石川西遺跡(10 例)、館野遺跡(2 例)の 38 か所(873 例)である。まとめた事例が確認できる遺跡は、赤松遺跡(29 例)、南三島遺跡(222 例)、大谷津 B 遺跡(48 例)、大谷津 A 遺跡(30 例)、筒戸 A・B 遺跡(62 例)、前田村遺跡(236 例)、つくば市境松遺跡(24 例)、鳥名境松遺跡(31 例)、土浦市下広岡遺跡(31 例)、宮前遺跡(35 例)



グラフ② 赤松遺跡における時期別・形態別屋内炉の割合



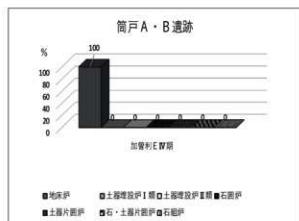
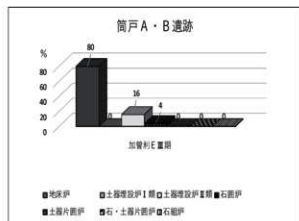
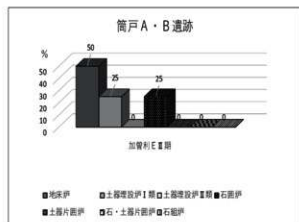
グラフ③ 大谷津B遺跡における時期別・形態別屋内炉の割合



グラフ④ 大谷津A遺跡における時期別・形態別屋内炉の割合

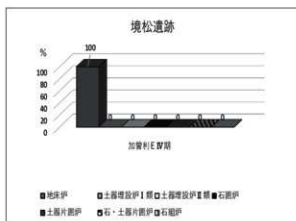
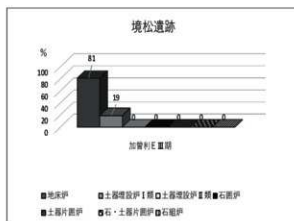
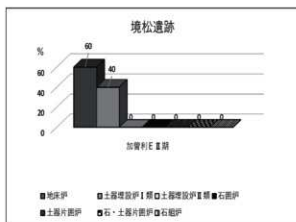
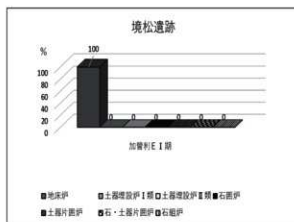
の10か所で、特に南三島遺跡と前田村遺跡の事例数は200例を超えており、他を大きく引き離している。県南地域の集成遺跡の数が多いため、これらのまとまった事例が確認できた10か所の遺跡の屋内炉についてまとめ、大まかな傾向と特徴などを導き出すことにする。赤松遺跡で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は29棟で、加曾利EⅡ式期が15棟（第2・4・5・6・7・8・10・11・17・19・24・25・32・36・38号）、加曾利EⅢ式期が11棟（第3・9・13・15・20・21・22・29・30・35・39号）、中期後葉が3棟（第16・18・40号）である。加曾利EⅡ式期の第4・6・7・8・10・11・17・19・24・25・32号竪穴建物跡の事例はいずれも地床炉、第2・5・36号竪穴建物跡の事例はいずれも土器埋設炉（Ⅰ類）、第38号竪穴建物跡の事例は土器片置炉である。加曾利EⅢ式期の第3・9・21・29・30・35・39号竪穴

建物跡の事例はいずれも地床炉、第13号堅穴建物跡の事例は土器片囲炉、第15・20・22号堅穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅰ類）である。なお、第9・35・40号堅穴建物跡の地床炉は土器埋設炉であった可能性がある。大谷津B遺跡で屋内炉が確認できた堅穴建物跡は48棟で、加曽利EⅢ式期が26棟（第7・10A・10B・14・15・20・24・27・28・33・34・35・44・45A・45B・46・47・48A・48b・51・53A・54A・55・56・57・58号）、加曽利EⅣ式期が9棟（第9A・16・17・18・21・22・50A・50B・52号）、中期後葉が13棟（第23・31・32・36・37・39・40・41・42A・42B・43・49・53B号）である。加曽利EⅢ式期の第10A・10B・14・15・20・24・27・28・33・34・45B・46・47・48A・48B・51・53A・55・57号堅穴建物跡の事例はいずれも地床炉、第54号堅穴建物跡の事例は埋設土器を有する石・土器片囲炉である。加曽利EⅣ式期の第9A・16・17・18・21・22・50A・50B号堅穴建物跡の事例はいず

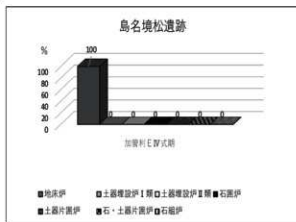
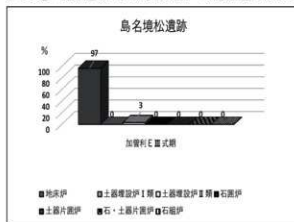


グラフ⑤ 筒戸A・B遺跡における時期別・形態別屋内炉の割合

れも地床炉、第52号堅穴建物跡の事例は石・土器片囲炉である。なお、第45B・51・57・50B号堅穴建物跡の地床炉は土器埋設炉であった可能性がある。大谷津A遺跡で屋内炉が確認できた堅穴建物跡は30棟で、阿玉台Ⅰb式期が1棟（第54号）、阿玉台Ⅱ式期が1棟（第23号）、阿玉台Ⅲ式期が1棟（第42号）、阿玉台Ⅳ式期が1棟（第66号）、加曽利EⅢ式期が20棟（第4・6・10・12・13・14・16・17・18・19・20・22・25・28・33・34・36・37・38・45・59・60・61・62号）、加曽利EⅣ式期が5棟（第45・59・60・61・62号）、中期が2棟（第1・31B号）である。阿玉台Ⅰb・Ⅱ式期の第54・23号堅穴建物跡の事例はどちらも地床炉である。阿玉台Ⅲ・Ⅳ式期の第42・66号堅穴建物跡の事例はどちらも土器埋設炉（Ⅱ類）である。加曽利EⅢ式期の第4・6・10・12・13・14・16・17・19・20・22・25・28・33・34・36・37・38・45・59・60・61・62号堅穴堅穴建物跡の事例はいずれも地床炉、第18号堅穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅱ類）である。加曽利EⅣ式期の第45・59・60・61・62号堅穴建物跡の事例はいずれも地床炉である。筒戸A・B遺跡で屋内炉が確認できた堅穴建物跡は62棟で、加曽利EⅡ式期が4棟（第5・8・45・68号）、加曽利EⅢ式期が25棟（第1・6・14・15・16・18・19・25・28・30・32・40・41・43・44・48・50・52A・56・57・72・73・74・77・78号）、加曽利EⅣ式期が9棟（第7・9・17・20・27・36・42・52B・63号）、中期後半が24棟（第4・11・12・

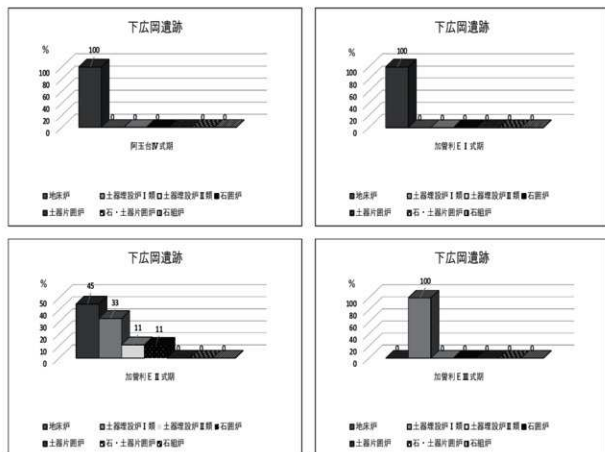


グラフ⑥ 境松遺跡における時期別・形態別屋内炉の割合



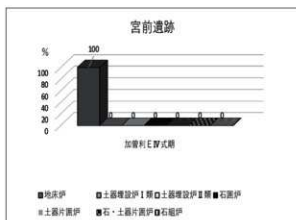
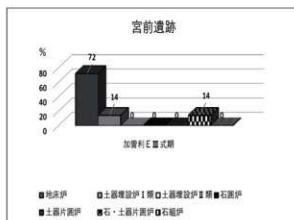
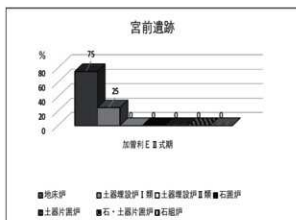
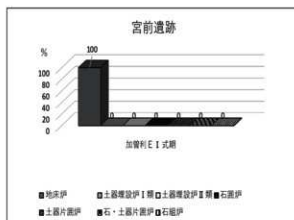
グラフ⑦ 島名境松遺跡における時期別・形態別屋内炉の割合

13・21・22・23・24・26・29・33・34・46・47・49・51・53・54・55・59・62・64・65・69号）である。加曾利 E Ⅱ式期の第 5・8 号竪穴建物跡の事例はどちらも地床炉、第 45 号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅰ類）、第 68 号竪穴建物跡の事例は石囲炉である。加曾利 E Ⅲ式期の第 1・14・15・16・18・25・28・30・32・40・41・43・44・48・50・52A・56・73・77・78 号竪穴竪穴建物跡の事例はいずれも地床炉、第 6・57・72・74 号竪穴建物跡の事例はいずれも土器埋設炉（Ⅱ類）、第 19 号竪穴建物跡の事例は埋設土器を有する石囲炉である。加曾利 E Ⅳ式期の第 7・9・17・20・27・36・42・52B・63 号竪穴建物跡の事例はいずれも地床炉である。境松遺跡で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は 24 棟で、加曾利 E Ⅰ式期が 1 棟（第 62 号）、加曾利 E Ⅱ式期が 5 棟（第 28・45・46・73・74 号）、加曾利 E Ⅲ式期

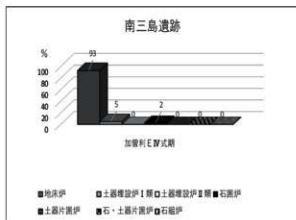
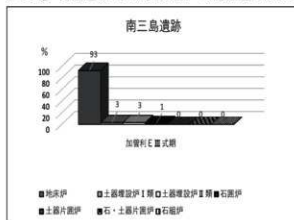


グラフ⑧ 下広岡遺跡における時期別・形態別屋内炉の割合

が16棟(第1・2・15・30・38・42・43・55・56・57・65・68・69・70・71・72号)、加曾利EⅣ式期が2棟(第13・14号)である。加曾利EⅠ式期の第62号竪穴建物跡の事例は地床炉である。加曾利EⅡ式期の第46・73・74号竪穴建物跡の事例はいずれも地床炉、第28・45号竪穴建物跡の事例はどちらも土器埋設炉(Ⅰ類)である。加曾利EⅢ式期の第1・2・15・30・38・42・43・55・56・65・70・71・72号竪穴建物跡の事例はいずれも地床炉、第57・68・69号竪穴建物跡の事例はいずれも土器埋設炉(Ⅰ類)である。加曾利EⅣ式期の第13・14号竪穴建物跡の事例はいずれも地床炉である。鳥名境松遺跡で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は31棟で、加曾利EⅢ式期が22棟(第1・2・3・4・5・6・7・8・9・11・13・18・19・20・21・30・31・32・33・34・37・38号)、加曾利EⅣ式期が9棟(第10・23・25・27・29・35・36・39・41号)である。加曾利EⅢ式期の第1・2・3・4・5・6・7・8・9・11・13・18・19・20・21・30・31・32・33・34・37・38号竪穴建物跡の事例はいずれも地床炉である。加曾利EⅣ式期の第10・23・25・27・29・35・36・39・41号竪穴建物跡の事例はいずれも地床炉である。なお、加曾利EⅢ式期の第4号竪穴建物跡の事例では地床炉と土器埋設炉(Ⅱ類)の2か所の屋内炉が確認できるが、新旧関係があるのか、併設なのかの判断が難しい。下広岡遺跡で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は31棟で、阿玉台Ⅳ式期が1棟(第38号)、加曾利EⅠ式期が4棟(第3・9・36・72号)、加曾利EⅡ式期が9棟(第15・22・26・35・43B・55・82・99・102号)、加曾利EⅢ式期が4棟(第7A・49・103・112号)、中期後半が13棟(第19・27・29・30・46・61・71・84・89・94・98・105・108号)である。阿玉台Ⅳ式期の第38号竪穴建物跡の事例は地床炉である。加曾利EⅠ式期の第3・9・36・72号竪穴建物跡の事例はいずれも地床炉である。加曾利EⅡ式期の第15・26・82・102号

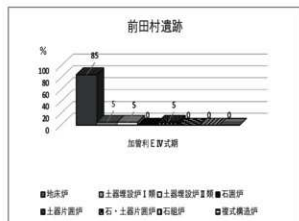
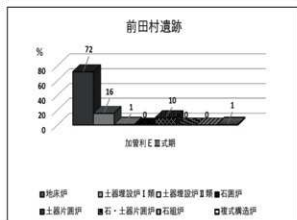
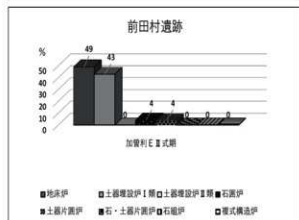
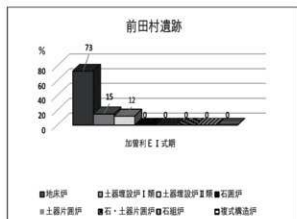
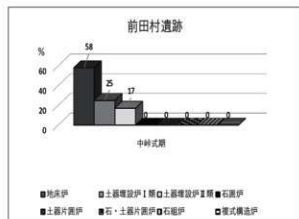
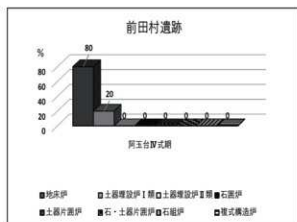
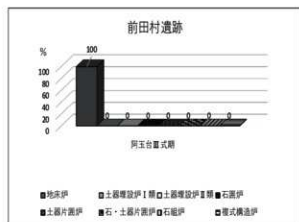


グラフ⑨ 宮前遺跡における時期別・形態別屋内炉の割合



グラフ⑩ 南三島遺跡における時期別・形態別屋内炉の割合

竪穴建物跡の事例はいずれも地床炉、第 35・43B・99 号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（I 類）、第 55 号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（II 類）、第 22 号竪穴建物跡の事例は埋設土器を有する石置炉である。加曽利 E III 式期の第 7A・49・103・112 号竪穴建物跡の事例はいずれも土器埋設炉（I 類）である。なお、土器埋設炉（I 類）と判断した加曽利 E III 式期の第 103・112 号竪穴建物跡の事例は前者に抜き取り痕、後者から礫 2 点が出土していることから、本来は埋設土器を有する石置炉の可能性もある。宮前遺跡で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は 35 棟で、加曽利 E I 式期が 4 棟（第 20・23・28・32 号）、加曽利 E II 式期が 3 棟（第 21・25・26 号）、加曽利 E III 式期が 18 棟（第 6・9・10・12・14A・14B・15・16・18・19・29・30・33・37・41・43・44・48 号）、加曽利 E IV 式期が 1 棟（第 4 号）、中期後半



グラフ⑪ 前田村遺跡における時期別・形態別屋内炉の割合

が9棟（第40・42・45・46・47・49・51・53号）である。加曾利EⅠ式期の第20・23・28・32号竪穴建物跡の事例はいずれも地床炉である。加曾利EⅡ式期の第21・25号竪穴建物跡の事例はいずれも地床炉、第26号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅰ類）である。加曾利EⅢ式期の第6・9・10・12・14A・14B・15・16・18・19・29・30・33・37・43・44・48号竪穴建物跡の事例はいずれも地床炉、第41号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅰ類）である。加曾利EⅣ式期の

第4号竪穴建物跡の事例は地床炉である。なお、加曾利EⅢ式期の第33号竪穴建物跡には有段式の竪穴建物で、その事例は地床炉と石・土器片囲炉の2か所の屋内炉であるが、新旧関係があるのか、併設なのかの判断が難しい。南三島遺跡で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は222棟である。数が多いため竪穴建物跡番号は割愛するが、加曾利EⅢ式期が95棟、加曾利EⅣ式期が65棟、中期後半が62棟である。加曾利EⅢ式期の第7・74・106号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅰ類）で、第18・51・128号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅱ類）で、第51号竪穴建物跡の事例は石囲炉である。その他の竪穴建物跡88棟はいずれも地床炉である。加曾利EⅣ式期の第4・6・56号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉Ⅰ類、第137号竪穴建物跡の事例は石囲炉である。その他の竪穴建物跡61棟はいずれも地床炉である。なお、加曾利EⅢ式期の第51号竪穴建物跡の事例では地床炉と石囲炉の2か所の屋内炉が確認できるが、新旧関係があるのか、併設なのかの判断が難しい。前田村遺跡で屋内炉が確認できた竪穴建物跡は236棟である。数が多いため竪穴建物跡番号は割愛するが、阿玉台Ⅲ式期が2棟、阿玉台Ⅳ式期が5棟、中峠式期が11棟、加曾利EⅠ式期が26棟、加曾利EⅡ式期が45棟、加曾利EⅢ式期が70棟、加曾利EⅣ式期が18棟、中期後半が14棟、中期が445棟である。阿玉台Ⅲ式期の第131・133号竪穴建物跡の事例はどちらも地床炉である。阿玉台Ⅳ式期の第128・297・356・400号竪穴建物跡の事例が地床炉、第188号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅰ類）である。中峠式期の第3A・231・501号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅰ類）、第118・450号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅱ類）、その他の竪穴建物跡6棟の事例はいずれも地床炉である。加曾利EⅠ式期の第65・232・248・535号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅰ類）、第114・141・246号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅱ類）、その他の竪穴建物跡19棟の事例はいずれも地床炉である。加曾利EⅡ式期の第183・199・203・205・238・319・323・324・330・331・336・364A・377・397・436・439・452・453・477・536号竪穴建物跡の事例はいずれも土器埋設炉（Ⅰ類）、第322・378号竪穴建物跡の事例はどちらも土器片囲炉、第181・207号竪穴建物跡の事例はどちらも石囲炉、その他の竪穴建物跡21棟の事例はいずれも地床炉である。加曾利EⅢ式期の第2A号・195・196・206・223・242・254・293・318・326・329・381号竪穴建物跡の事例はいずれも土器埋設炉（Ⅰ類）、第403号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅱ類）、第137・155・200・202・221・360・503号竪穴建物跡の事例はいずれも土器片囲炉、第347号竪穴建物跡の事例は複式構造炉、その他の竪穴建物跡49棟の事例はいずれも地床炉である。加曾利EⅣ式期の第362号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅱ類）、第363号竪穴建物跡の事例は土器埋設炉（Ⅰ類）、第68号竪穴建物跡の事例は土器片囲炉、その他の竪穴建物跡15棟の事例はいずれも地床炉である。なお、中峠式期の第118号竪穴建物跡で地床炉と土器埋設炉（Ⅱ類）、加曾利EⅡ式期の第364A・397号竪穴建物跡で地床炉と土器埋設炉（Ⅰ類）、加曾利EⅢ式期の第137・323号竪穴建物跡で地床炉と土器片囲炉、第327号竪穴建物跡で地床炉と土器埋設炉（Ⅱ類）、第347号竪穴建物跡で地床炉と複式構造炉、加曾利EⅣ式の第68号竪穴建物跡で地床炉と土器片囲炉の2か所の屋内炉が確認できるが、新旧関係があるのか、併設なのかの判断が難しい。また、鈴木氏はかは、「石組炉・土器埋設炉の複合形態の中で、石組以外に土器が埋設された加曾利EⅡ？式期の前田村F323住と同F327住の事例が『土器埋設複式炉』[日黒1995]に相当する」³⁰⁾と述べてられている。

県南地域における縄文時代中期の屋内炉は、中期中葉～後葉まで圧倒的に地床炉が優勢であり、次いで土器埋設炉（Ⅰ類：阿玉台Ⅲ式期～加曾利EⅡ式期、Ⅱ類：加曾利EⅢ式期）、石囲炉（加曾利EⅠ～Ⅲ式期）となっている。石囲炉は加曾利EⅡ・Ⅲ式期を主体に認められるが、当該地域では低調な

形態である。加曾利EⅣ式期になると石囲炉はほとんど認められなくなる。土器片囲炉も各時期で低調であるが、加曾利EⅡ～Ⅳ式期に単発的に認められる。前田村遺跡では加曾利EⅢ式期にピークが認められる。各時期で石・土器片囲炉はほとんど認められないが、宮前遺跡の加曾利EⅢ式期に認められる。土器埋設炉については、各時期を通じてⅠ類が主体的である。前田村遺跡ではⅡ類が中峠式期・加曾利EⅠ式期に例外的に多く認められるが、筒戸A・B遺跡と鳥名境松遺跡の加曾利EⅢ式期の状況を考慮すると、Ⅱ類は中峠式期・加曾利EⅠ式期と加曾利EⅢ・Ⅳ式期にピークを迎え、加曾利EⅣ式期になると石囲炉などと共に数を減らすと考えられる。繰り返しになるが、前田村遺跡の第323・327号竪穴建物跡の事例について、鈴木氏は「土器埋設複式炉」³⁴⁾と判断されているが、筆者は現段階では狭義の複式炉に含めることに抵抗がある。また、同遺跡の加曾利EⅢ式期の第347号竪穴建物跡の事例については、「複式構造炉」³⁵⁾という名称を付けて区別し、今後の資料増加に期待したい。なお、鈴木氏ほかによれば、南部における縄文時代中期後葉から後期前葉の屋内炉の地域性は、「石組炉の希少さと土器片組炉の存在によって抽出」され、「量的には単純形態の地床炉が過半数を占める。次に多いのは土器埋設炉」で、前田村遺跡の例では、「土器埋設炉の複合形態は、加曾利E式期をピークに中峠式並行期から加曾利EⅢ式期に確認できる。一方、単純形態の土器埋設炉は、中峠式並行期～加曾利EⅠ式期に集中し、加曾利EⅢ～Ⅳ式期になると土器埋設自体が減少する」³⁶⁾と総括されている。この点については、筆者の分析からも概ね同様な傾向を指摘することができる。

7 小結

以上の通り、茨城県域の縄文時代中期の屋内炉について、時期・地域毎の形態的特徴を把握することを目的に、これまでに当財団が調査・整理報告した遺跡の中から、縄文時代中期の屋内炉を集成し、本稿ではそれらの分析と考察を行った。また、約1世紀にわたる縄文時代の炉跡研究を回顧し、その成果と課題を整理した。幾ばくかでも縄文時代の炉跡研究に寄与することができれば幸いである。

優れた先行研究である鈴木氏ほかによる茨城県域における縄文時代中期後葉の屋内炉の集成・分析によれば、「茨城県域では、北部が石組炉、中・南部が地床炉を典型としながら、他の単純形態の炉、複合形態の炉を組成する」³⁷⁾と簡潔に結論づけられている。筆者の分析からは、縄文時代中期の屋内炉に利用する石材が比較的豊富な地域的特徴を有する地域である県北地域と筑波山系地域では、屋内炉の形態として石囲炉と石組炉が主体となり、その周辺である県央・県南・県西地域では必要な石材は確保し、また、集落内の石皿・磨石・敲石、石棒の破片を炉石に再利用して石囲炉を低調ながら構築している。県央・県東・県南・県西地域では地床炉が圧倒的に多く、次いで土器埋設炉が相互補完的に用いられている。土器片囲炉と石・土器片囲炉は県南・県西地域の加曾利EⅡ～Ⅳ式期において僅かに認められる。このように県域においては石材確保が容易であるという地域的特徴によって縄文時代中期の屋内炉は、北部・山岳部の石囲炉・石組炉と南部の地床炉・土器埋設炉に大別できる。また、南部では土器埋設炉、土器片囲炉、その他のバリエーションによる組み合わせによって複雑な様相を呈している。県央・県東・県南・県西地域で主体となる地床炉については、その平均規模〔長軸(径)×短軸(径)×深さ・単位:m〕が、阿玉台式・中峠式期で $0.81 \times 0.66 \times 0.09$ 、加曾利EⅠ式期で $0.87 \times 0.65 \times 0.1$ 、加曾利EⅡ式期で $0.92 \times 0.71 \times 0.12$ 、加曾利EⅢ式期で $0.96 \times 0.76 \times 0.2$ 、加曾利EⅣ式期で $0.85 \times 0.7 \times 0.2$ となり、加曾利EⅢ式期になると規模が大きくなる傾向を指摘できる。地床炉の深さについては、鈴木氏は「炉内の掻き出しを繰り返すことにより掘り窪めたような形状に変化することが考えられる」〔中村 1996〕³⁸⁾と指摘されている。この点に関しては、も

もちろんそのような使用段階での形状の変化は想定できるが、構築段階から地床の深さに一定の意味を持たせている場合も容易に考えられる。いずれにしても調査時に炉跡を正確に記録する努力を惜まず、炉床面、炉石などの抜き取り痕跡、炉堀方の状態についての詳細な観察、また、炉跡内部からの出土遺物については、炉体土器の残骸と焼礫の有無、炉体土器や炉石などの被熱痕跡の観察結果を報告書に掲載することが肝要である。炉跡の形成論的研究はそうした地道な記録の積み重ねによって大きく前進すると言えよう。

最後になるが、今後も縄文時代中期の屋内炉について資料を蓄積し、時期・地域毎に丁寧に研究していくことは、利用できる石材の有無という自然的要因だけでなく、その集落としての特徴・個性、集団の系統・関係性などを知る手がかりとなり、縄文社会・文化の解明につながる有効なアプローチと考える。

引用・参考文献

- 坪井正五郎 「越後発見の石器時代火焚き場」『東京人類学会雑誌』 第293号 1914年
- 梅宮茂 「飯野山住居跡調査報告」『福島県文化財調査報告』 第8集 福島県教育委員会 1960年
- 荒崎孝一郎 「茨城県宮後遺跡における縄文中期竪穴住居跡の形態－炉跡の形態を中心として－」『研究ノート』 11号 財団法人茨城県教育財団 2002年
- 鈴木素行ほか 「茨城県における縄文時代中期後葉の屋内炉」『日本考古学協会 2005年度福島大会シンポジウム資料集』 日本考古学協会 2005年度福島大会実行委員会 2005年
- 亀井翼 「炉体土器の使用痕跡研究」『筑波大学 先史学・考古学研究』 第19号 2008年
- 縄文時代の炉跡研究について、筆者はその研究史の1920年代後半から1990年代前半までを回顧している。本稿では1990年代後半から現在までの研究史を加筆して、全体的に再編集したものである。
駒澤悦郎 「縄文時代の竪穴建物跡と屋内炉の研究（前編）」『葛城流－川井正一・斎藤弘道・佐藤正好先生選記念論集－』 川井正一・斎藤弘道・佐藤正好先生選記念事業実行委員会 2007年
- 鈴木素行氏らによる2005年の茨城県における縄文時代中期後葉の屋内炉の集成では、県内市町村による遺跡調査の事例として42遺跡から約600基（筆者推定）の屋内炉について分析されている。今回の筆者らによる集成と合計すると、縄文時代中期の165遺跡から約1656基の屋内炉を確認したことになる。2005年以降、県内市町村による縄文時代中期遺跡の調査件数も増加していると予想され、現在、県域における縄文時代中期の屋内炉の確認数は、2000基に迫る数であると推定できる。
- 筆者は、縄文時代中期の屋内炉の形態分類について、「地床炉」、「土器埋設炉」、「石囲炉」、「土器片囲炉」、「土器片・石囲炉」、「石組炉」、「複式構造炉」の7形態に大別した。「複式構造炉」の呼称は、今後変更する可能性もあるが、狭義の「複式炉」と区別するために用いた。また、鈴木氏らが提唱する単純形態の炉の複合形態となる炉跡の総称としても使用できるのではないかと考えている。屋内炉の形態分類については、「炉跡は二次的に変化する要素を多く含んでいることから、その認定にあたっては調査時における詳細な検討が必要である」（小栗一夫・1997年）。「炉跡には、報告書の記載から多様な状態を認める。その属性の細別を始めることは、多様性の記述ではあっても、最終的な状態の描写」（鈴木素行ほか・2005年）であるといった指摘は、極めて重要である。茨城県域の縄文時代中期の屋内炉の形態で圧倒的に多い地床炉の中には、埋設土器や炉石、圍繞していた土器片などが抜き取られたものが数多く含まれているはずである。竪穴建物廃絶以降における様々な自然的・人為的影響を受けた屋内炉の詳細な観察・記録によって、本来の屋内炉の形態を追究し続ける姿勢が求められる。
- 鈴木素行氏らによる2005年の茨城県における縄文時代中期後葉の屋内炉の集成によれば、県域における日黒吉明氏分類の「複式炉」に該当する屋内炉は、日上市上の代遺跡（1基）、同市上の内遺跡（2基）、那珂市金沢沢遺跡（1基）、ひたちなか市三反田観塚遺跡（1基）、つくばみらい市前田村遺跡（2基）から合計7基（2005年現在）であると述べられている。ただし、いずれも狭義の「複式炉」ではなく、形態の変容が著しい。茨城県域で確認される複式構造炉と狭義の「複式炉」との関連性は、斜位土器埋設炉の問題を含め、さらなる多方面からの分析・検討が必要である。
- 日黒吉明 「住居の炉」『縄文文化の研究』8・社会・文化 雄山閣 1982年
- 坪井正五郎 「越後発見の石器時代火焚き場」『東京人類学会雑誌』 25－293 1914年
柴田常恵 「高ヶ坂石器時代住居跡」『史蹟名勝天然記念物』 1－10 1936年
谷川（大場）雄雄 「南豆見高石器時代住居跡の研究」『日本石器時代住居跡』 1927年
直良信夫 「兵庫陣下における二つの石器時代燬について」『人類学雑誌』 44－2 1929年
後藤守一 「船田向石器時代住居跡」『東京府史蹟保存物調査報告』 10 1933年
- 宮坂英次 「八ヶ岳山麓矢石遺跡発掘遺構の二型」『考古学』 7－10 1936年
「矢石先史集落跡の研究（概要）－日本石器時代中部山岳地帯の文化－」『諏訪史談会会報』 3 1946年
「八ヶ岳山麓矢石遺跡集落の形成についての一考察（上）（下）」『考古学雑誌』 36－3・4 1950年
「矢石」 茅野町教育委員会 1957年
- 大宮守誠 「千葉縣加曾利古山加城に就いて」『考古学雑誌』 27－6 1937年
赤星直志ほか 「神奈川三浦郡三崎町諸磯貝塚に於ける竪穴住居跡について」『史前学雑誌』 10－3 1938年
酒造伸男 「石器時代の寒暖」『あんとろはす』 2－2－9 1947年

- 後藤守一「草花第二遺蹟」『東京府史蹟保存調査報告』14 1938 年
- 矢島清作「千葉縣幸田貝塚の竪穴住居遺蹟」『古代文化』20-4 1941 年
- 和島誠一「原始聚落の構成」『日本歴史学講座』学生社 1948 年
- 城田光「縄文時代竪穴住居の研究」(同『縄文時代の基礎研究』1982 年 所収) 1956 年
- 「縄文時代の共同体」『歴史教育』14-3 1966 年
- 江坂輝彌「住居」『考古学ノート』2 1967 年
- 寺田兼方「数石住居址の研究」『若本考古』44 1968 年
- 堀倉隆「東北地方における縄文集落の研究」『東北大学考古学研究報告』1 1985 年
- 14) 丹羽茂「縄文時代における中期社会の崩壊と後期社会の成立に関する試論」『福島大学研究紀要』1 1971 年
- 15) 今村啓爾「縄文時代早期の竪穴住居址にみられる方形の掘り込みについて」『古代』80 1985 年
- 16) 野中和夫「竪穴住居の出現と楚の普遍性について-縄文時代早期後半を中心として-」『史観』36 1986 年
- 17) 註16) に同じ
- 18) 註17) に同じ
- 19) 高麗正「中央部入り込み部と陸奥道跡」『滝坂道跡』三鷹市埋蔵文化財調査報告第13集 三鷹市道跡調査会・三鷹市教育委員会 1988 年
- 20) 長崎元広「中部地方における縄文前期の竪穴住居」『信濃』31-2 1979 年
- 21) 長崎元広ほか「長野県における縄文時代集落遺跡資料集成図集」『シンポジウム縄文時代集落の変遷』日本考古学協会昭和59年度大会資料 1984 年
- 22) 笹森健一「縄文時代前期の住居と集落(Ⅰ)」『土曜考古』3 1981 年 24)
- 23) 植田光男「第1号住居跡」『上野ヶ谷戸遺蹟』日高町埋蔵文化財報告第6集 日高町上野ヶ谷戸遺蹟調査会 1984 年
- 24) 三田村美彦「SIOZBの炉址南端に埋設された土器について」『宿道跡』北区埋蔵文化財調査報告第2集 北区教育委員会 1987 年
- 25) 小林達雄「縄文社会の集落形態」『世界考古学大系』日本編・補遺 1987 年
- 26) 戸沢光則「炉穴について」『美野輪台道跡-A地点(貝塚)-』市立市川博物館研究調査報告第1冊 市川市教育委員会・市立市川博物館 1974 年
- 27) 山本暉久「炉穴について」『上浜田道跡』神奈川縣埋蔵文化財調査報告15 神奈川県教育委員会 1979 年
- 28) 宇田川洋「北海道縄文時代中期の住居址」『茅沼道跡群-興路川流域の道跡-』北海道茶別町教育委員会 1979 年
- 29) 宮本長二郎「古代の住居と集落」『講座日本技術の社会史』7・建築 日本評論社 1983 年
- 30) 宮本長二郎「如からカマドへ」『季刊考古学』32 1990 年
- 31) 今橋浩一「阿玉台文化の一面-二段体構造住居址の検討-」『古代探義』Ⅱ 1985 年
- 32) 中野修秀「有段式竪穴遺構に関する覚書-関東地方縄文中期における異系統の竪穴住居址-」『日本考古学研究所集報』Ⅷ 1985 年
- 33) 小林達雄「縄文社会の居住空間」『國學院大学大学院紀要 文学研究科』19 1988 年
- 34) 註10) に同じ
- 35) 註26) に同じ
- 36) 小堀一夫「住居型式」設定のための基礎的作業」『東京考古』15 東京考古談話会 1997 年
- 37) 縄文時代中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会「縄文時代中期集落研究の新地平(発表要旨・資料)」1995 年
- 38) 加納実「下総台地における加曾利EⅢ式期の諸問題-集落の成立に関する予察を中心として-」『研究紀要』16-20周年記念論文集-千葉県文化財センター 1995 年
- 39) 中山俊之「斜位土器埋設炉について」『墨木戸』印旛郡市文化財センター 1995 年
- 40) 渡辺新「複構造の住居跡-集落する土器墓群-市川市高谷津道跡の事例紹介と若干の考察-」『貝塚博物館紀要』第24号 加曾利貝塚博物館 1997 年
- 41) 小倉和重「斜位土器埋設炉についての一考察-複式炉との比較を通して-」『奈和』第38号 1998 年
- 42) 三上徹也「土器利用炉の分類とその意義」『長野県立博物館研究紀要』第1号 1995 年
- 「縄文人の実用と嗜好-土器利用炉にみる分析論的考察-」『考古学研究』第45巻第4号 1990 年
- 43) 渡邊千尋「縄文時代中期における炉形態の変遷」『蘭帆』早稲田大学大学院文学研究科考古学談話会 2004 年
- 44) 荒島克一郎「茨城町宮後道跡における縄文時代中期竪穴住居址の形態-炉跡の形態を中心として-」『研究ノート』11号 財団法人茨城県教育財団 2002 年
- 45) 鈴木素行ほか「茨城県における縄文時代中期後葉の屋内炉」『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会 2005 年
- 46) 亀井翼「炉体土器の使用痕跡研究」『筑波大学 先史学・考古学研究』第19号 2008 年
- 47) 磯部裕史「縄文時代屋内炉研究-研究の整理と研究視点の提示」『國學院大学学術資料館考古学資料館紀要』第26号 2010 年
- 48) 註8) に同じ
- 49) 註45) に同じ
- 50) 註45) に同じ
- 51) 註45) に同じ
- 52) 註45) に同じ
- 53) 註45) に同じ
- 54) 註45) に同じ

- 55) 「複式炉」、「複合の炉跡」（加納 1995）、「複構造炉」（渡辺 1997）、「斜位土器埋設炉」（小倉 1998）などの名称が提唱されているように、中期後葉における屋内炉構造の複式化（複構造化）については、広く認められる傾向である。地床炉の深さについても加曾利EⅢ式期にその規模が大きくなる傾向が指摘できる。最も単純かつ普遍的な屋内炉の形態と言える地床炉についても、加曾利EⅢ式期を境にその実用的な機能、社会的・観念的な役割などが変質していった可能性がある。

- 56) 註45)に同じ
57) 註45)に同じ
58) 註45)に同じ

参考文献

- ・阿部昭典 「縄文時代中期末葉～後期前葉の変遷～複式炉を有する住居の消失と柄杓形敷石住居の波及」『物質文化』第69号 2000年
- ・阿部昭典 「複式炉の研究」『新潟考古学談話会会報』第20号 1999年
- ・石部正志 「考古学からみた火」『古代日本文化の研究 火』社会思想社 1974年
- ・市川金丸ほか 「三内沢部遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第41集 青森県教育委員会 1977年
- ・市川金丸 「東北北部の縄文時代中期の竪穴住居跡」『考古学ジャーナル』170 1979年
- ・伊藤恒彦 「自由学園南遺跡～東京都東久留米市所在の先土器時代・縄文時代遺跡の調査～」自由学園 1983年
- ・岩井住男ほか 「棚棚」『風翔』7 1970
- ・鶴岡幸雄 「棚棚遺跡の縄文時代集落の概観」『棚棚～ハッ岳山麓における縄文時代中期の集落遺跡～』茅野市教育委員会 1990年
- ・海老原雄雄 「橋本県における縄文中期の炉について」『宇大史学』4 1983年
- ・大賀美明 「炉形態の変遷からみた棚敷文化」『列島の考古学～渡辺誠先生還暦記念論集』渡辺誠先生還暦記念論集刊行会 1998年
- ・岡崎文喜 「考察」『高根木戸～縄文時代中期集落址調査報告書～』船橋市教育委員会 1971年
- ・小川和博 「千栗園における縄文中期末の居住形態（予察）」『奈和』17 1979年
- ・小野和之 「三原田城遺跡のまともな・住居址について」『三原田城遺跡 関越自動車道（新潟線）地境埋蔵文化財発掘調査報告書第13集 群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987年
- ・小野真一 「静岡県の縄文文化について」『地方史静岡』創刊号 1971年
- ・折井教 「ハッ岳山麓における縄文中期の炉形態の変遷に関する一考察」『長野県考古学会誌』28 1977年
- ・杉浦幹夫 「島之上・出口道の住居址と土塙について」『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ～前浜・島之上・出口・芝山～』埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集 埼玉県教育委員会 1977年
- ・笹原芳郎ほか 「旧石器時代後期の炉跡・焚火跡」『考古学ジャーナル』351 1992年
- ・加藤綾 「中期縄文人のすまい」『Circum-Pacific』1 1975年
- ・上川名昭 「中期縄文文化論」1984年
- ・神村透 「下伊那地方の縄文中期後半の榎根～住居址を中心に～」『日本民族文化とその周辺～国分賞一博士古希記念論集～』考古編1980年
- ・木崎道昭 「縄文時代中期の集落について」『奈良地区遺跡群Ⅰ発掘調査報告～受地がいやま遺跡～』上巻 住宅・都市整備公団・奈良地区遺跡調査団 1986年
- ・棚原健 「住居と集落の変遷～特に住居址内における火使用の問題～」『井戸尻・長野県富士見町における中期縄文時代遺跡群の研究』中央公論美術出版 1965年
- ・棚原健 「和田遺跡群東地区に見られる縄文中期集落の問題点」『長野県考古学会誌』11 1971年
- ・棚原健 「土器が提案された庵屋の性格」『考古学ジャーナル』127 1976年
- ・向坂潤二 「縄文時代」『静岡県史』資料編1・考古1 1990年
- ・小栗一夫ほか 「住居跡から住居へ～縄文時代の竪穴住居における研究史的素描として～」『東国史論』4 1989年
- ・越田和夫 「縄文時代中期における住居跡（炉址）について」『福島大学研究紀要』2 1972年
- ・島田俊彰 「富山朝日町山下新遺跡第一次発掘調査概報」富山県教育委員会 1973年
- ・後藤守一 「船田向石器時代住居遺蹟」『東京府史蹟保存物調査報告』10 1933年
- ・後藤守一 「上古時代の住居（上）（中）（下）」『人類学先史学講座』15・16・17 1940年
- ・後藤信祐 「概観遺跡における竪穴住居建て替えに関する覚書～竪穴住居建て替えに伴う炉の作り替えパターン～」『研究紀要』第9号（財）とちぎ生涯学習文化財財団埋蔵文化財センター 2000年
- ・後藤信祐 「雲ノ原遺跡の複式炉の再検討 橋本県における複式炉の終焉」『研究紀要』第13号（財）とちぎ生涯学習文化財財団埋蔵文化財センター 2005年
- ・後藤信祐 「加曾利Eの複式炉・大木の複式炉 掘り方と埋設土器の相違からみた概観遺跡の複式炉の検討」『研究紀要』第18号（公財）とちぎ生涯学習文化財財団埋蔵文化財センター 2010年
- ・小林謙一 「縄文時代中期棚敷式・阿玉台式土器成立期における竪穴住居の分析～地域文化成立過程の考古学的研究～」『信濃』42～10 1990年
- ・駒木野智寛 「複式炉の研究～岩手県内における複式炉の地域別分布傾向とその分析～」『紀要』第23号（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004年
- ・駒木野智寛 「縄文時代中期後半の岩手県域における竪穴式住居出入口の包圍決定要因について」『季刊地理学』第67号 2016年
- ・酒井宗孝 「岩手県北部における縄文中期後葉から後期前葉の住居跡」『紀要』Ⅷ（財）岩手県埋蔵文化財センター 1987年
- ・坂本真弓 「屈部型複式炉の現在～青森県内の複式炉集成から～」『海と考古学とロマン』市川金丸先生古稀記念献呈論文集 2002年

- ・佐々木七郎「山形県岡田道跡－縄文時代中期の集落址についての一考察－」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集 山形県の考古と歴史』山形県史学会 1967年
- ・笹森健一「住居址の構造について」『志久道跡 埼玉県道跡発掘調査報告書第31集 埼玉県道跡調査会 1976年
- ・嶋崎弘之「東京都神谷原道跡の勝取日集落－報告書『神谷原』の分析から－」『土曜考古』10 1985年
- ・西柳嘉章「石川県における縄文時代住居址の集成」『石川県考古学研究会々誌』14 1971年
- ・菅原哲文「山形県における複式住居の様相」『研究紀要』第4号 公益財団法人山形県埋蔵文化財センター 2006年
- ・鈴木忠司「旧石器人のイエとロー－住居とピット－」『季刊考古学』4 1983年
- ・鈴木美治「阿玉台期における堅穴住居跡の形態についての一考察－茨城及び周辺地域を中心として－」『（財）茨城県教育財団年報』3 1984年
- ・須藤隆「東北地方における縄文集落の研究」『東北大学考古学報告』1 1985年
- ・関和彦「山村と漁村」『日本村落史講座』2・景観 雄山閣 1990年
- ・関和彦「古代村落の再検討と村落首長－『新たな実証』を目指して－」『歴史学研究』619 1991年
- ・関和彦「古代史研究者と文化財－堅穴「住居」に思う－」『道跡が消える－研究と保存運動の現場から－』青木書店 1991年
- ・高橋与右衛門「まとも」『川向三道路跡発掘調査報告書 岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第26集（財）岩手県埋蔵文化財センター・岩手県二戸土地改良事業所 1980年
- ・高橋保雄「縄文時代中期後葉－後期初頭の如くの変遷－新潟県阿賀町 北野道跡の如く検討」『研究紀要』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2007年
- ・竹尾達也「多摩ニュータウン地域における縄文時代中期の住居形態」『多摩のあゆみ』62 1991年
- ・谷井彪「結語」『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告1－南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影－』埼玉県道跡発掘調査報告書第3集 埼玉県教育委員会 1974年
- ・村田文夫「川崎市瀬見台道跡の縄文中期集落復原への一試論」『古代文化』26－4 1974年
- ・村田文夫「長野県横道跡縄文ムラの語り－中期集落理解にむけての断想－」『縄文時代』3 1992年
- ・丹野雅人「前期住居跡」『多摩ニュータウン道跡・昭和62年度 東京都埋蔵文化財センター調査報告第10集 東京都埋蔵文化財センター 1989年
- ・宮裡泰時「秋田県横道跡発見の住居跡」『考古学ジャーナル』99 1974年
- ・土肥孝「縄文人はどのような家と村に生んでいたのか」『新視点 日本の歴史』第1巻・原始編 新人物往來社 1993年
- ・長田実ほか「伊豆修善寺町町立道跡調査報告－縄文時代中期集落の一形態－」『修善寺町史料第2集 静岡県教育委員会・修善寺町教育委員会 1964年
- ・長山明弘「那須塩原市草刈町下道跡の複式住と土器－『下野郡那須郡石林の発見物』の再吟味－」『千葉大学大学院人文社会科学部研究科研究プロジェクト報告書』第251巻 2013年
- ・中村哲也「弥生時代住居址の施設の観察」『根本道跡 陸研研究所報告 2 美濃村・陸研調査会
- ・新井健「縄文晩期集落の構成と動態－八ヶ岳南麓・金生道跡を中心に－」『縄文時代』3 1992年
- ・丹羽茂「福島県における縄文時代中期の住居・集落跡研究の現状と問題点」『福島考古』15 1974年
- ・藤沢宗平「緒言」『月見松道跡緊急発掘調査報告書』伊那市教育委員会 1968年
- ・藤森英一「原始大穴集落の考古学的研究について」『歴史教育』14－3 1966年
- ・星川清親ほか「縄文時代の遺構の変遷」『七ヶ宿ダム関連道跡発掘調査報告書』付録 宮城県文化財調査報告書第126集 宮城県教育委員会・建設省七ヶ宿ダム工事事務所 1988年
- ・増子正三「新潟県における東北系複式住」『北越考古学』1988年
- ・三浦謙一ほか「縄文時代前・中期の住居址群の変遷－松尾村長者屋敷道跡の分析－」『紀要』V（財）岩手県埋蔵文化財センター 1985年
- ・三浦謙一「複式住を有する住居に住まう－床面痕跡から見る空間利用試論－」『福島県文化財センター白河館研究紀要2013』2013年
- ・三上徹也「縄文時代居住システムの一様相－中部・関東地方の中期を中心として－」『関古史学』88 1993年
- ・水野正好「縄文式文化期における集落構造と宗教」『日本考古学協会第29回総会研究発表要旨』1993年
- ・水野正好「縄文時代集落復原への基礎的検討」『古代文化』21－3・4 1969年
- ・南久和はか「駒生道跡－石川県能美郡辰口町 生道跡発掘調査報告－」『辰口町教育委員会 1978年
- ・南久和はか「金沢市笠舞道跡 金沢市文化財紀要 29 金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会 1981年
- ・宮本二郎ほか「縄文時代の堅穴住居－北海道地方の場合－」『季刊考古学』7 1984年
- ・宮本二郎ほか「縄文時代の堅穴住居－長野県－」『信濃』37－5 1985年
- ・森谷康平「秋田県内における複式住居の規模と変遷について」『秋田県埋蔵文化センター研究紀要』第36号 2021年
- ・八木光則「縄文集落の素相（1）－信濃伊那谷における集落共同体をめぐって－」『長野県考古学会誌』25 1976年
- ・安田忠市「秋田県野所野段道跡群について－縄文時代前・中期の住居跡－」『長野県考古学会誌』7 1991年
- ・柳田敏司ほか「神明貝塚 庄和町文化財調査報告第2集 庄和町教育委員会 1970年
- ・山崎光浩ほか「三春ダム関連道跡発掘調査報告3－春田道跡・下田道跡（第2次）－」『福島県文化財調査報告書第235集 福島県教育委員会・（財）福島県文化センター・建設省東北地方建設局 1990年
- ・山本直人「北陸における複式住居出現段階の如く」『石川県考古学研究会々誌』30 1987年
- ・渡辺修一「堅穴住居」か「堅穴建物」か」『研究道誌』34 1992年
- ・渡邊千尋「縄文時代中期における如形の変遷」『關東』早稲田大学大学院文学研究科考古談話会 2004年

出典（公益財団法人茨城県教育財団発行報告書）

- ・茨城県教育財団文化財調査報告Ⅰ 松葉道 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 1979年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告Ⅴ 常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 1980年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告Ⅶ 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ 1981年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告Ⅷ 常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 1981年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告ⅩⅤ 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ 1982年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告ⅩⅦ 常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ 宮部道 鹿の子入道 砂川道 1982年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第18集 水海道都市計画事業・小組土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 大谷津B道 1983年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第24集 水海道都市計画事業・小組土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 戸戸A道 戸戸B道 1984年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第25集 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書Ⅸ 仲根台道 町田道 1984年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第27集 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書Ⅹ 南三島道Ⅰ・Ⅱ区 1984年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第28集 水海道都市計画事業・小組土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 大谷津A道 1985年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第30集 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書Ⅺ 南三島道Ⅵ・Ⅶ区 1985年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第32集 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書Ⅻ 南三島道Ⅴ区 1986年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第34集 研究学園都市計画学生工業団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 大境道 1986年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第41集 主要地方道磐城線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 境松道 1987年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第44集 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書Ⅻ 南三島道Ⅲ・Ⅳ区（Ⅰ） 1987年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第66集 一般県道土浦岩井線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 神谷森道 1991年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第73集 一般県道西小境真岡線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 真山道 1992年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第87集 伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 西ノ脇道 前田村道 1994年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第88集 茨城県自然博物館（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 高崎日塚 1994年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第90集 一般県道谷田部藤代線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 枝西道 上岩崎南道 1994年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第102集 （仮称）北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 中台道 1995年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第107集 取手都市計画事業下高井特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 甚五郎道 下高井
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第108集 主要地方道水戸茂木線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 上入野道 青木道 後無道 前無道 1996年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第116集 伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 前田村道Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区 1997年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第118集 都市計画阿荒川沖木田余線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 宮前道 1997年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第127集 伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 高野台道 前田村道Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区 1997年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第131集 主要地方道つくば古河線緊急地方道路事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 大橋B道 跡道 才伝道 1997年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第143集 取手都市計画事業下高井特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 東原道 前原道 柏原道 1999年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第146集 伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 前田村道Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区 1997年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第147集 伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ 前田村道Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区 1997年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第170集 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 中原道Ⅲ 2001年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第179集 十万原地区市街地開発事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 十万原道Ⅰ 2001年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第182集 上野陣地道 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ 2002年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第188集 宮後道Ⅰ やさしまのまち「板の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 2002年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第191集 鳥名前野東道 鳥名・福田坪一帯が手特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 2002年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第200集 御園生道 国綱緊急道Ⅰ4-08-241-0-050号埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 2003年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第206集 北田道 主要地方道石岡下館線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 2003年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第226集 松田古墳群 北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ 2004年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第240集 宮後道Ⅱ やさしまのまち「板の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 2005年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第255集 山ノ入古墳群 大日下道 北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 2006年

- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 261 集 根岸西道路 主要地方道常陸笠間線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 2006 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 267 集 新井南山道路 手代木田向西道路 一般国道 468 号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書 2007 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 281 集 烏名境松道路 烏名前野東道路 烏名・福田坪一帯特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 2007 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 285 集 上野古屋敷道路 1 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ 2007 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 286 集 中崎道路 見松道路 一般国道 468 号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書 2008 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 292 集 下河原崎谷中台道路 下河原崎高山古墳群 上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 4 2008 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 299 集 三村城跡 一般県道飯岡石岡線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書 2008 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 317 集 大谷貝塚 国道 125 号大谷バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 2009 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 320 集 石川道路 石川塚 旧百里原海軍飛行場掩体壕群 茨城空港テクノパーク整備事業地内埋蔵文化財調査報告書 2009 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 321 集 石川西道路 茨城空港テクノパーク整備事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 2009 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 330 集 大谷貝塚 2 国道 125 号大谷バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 3 2010 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 331 集 北田道路 2 主要地方道石岡筑西線道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書 2010 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 332 集 十王堂道路 主要地方道常陸笠間線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 2010 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 341 集 堀町西古墳 一般県道真端水戸線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書 2011 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 348 集 新松道路 長原道路 国道 355 号石岡岩間バイパス整備事業地内埋蔵文化財調査報告書 2011 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 351 集 見松道路 2 一般国道 468 号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書 2012 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 352 集 朝池新田道路 首都圏氾濫区域域防強化対策事業地内埋蔵文化財調査報告書 1 2012 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 361 集 前田村道路 伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 6 2012 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 370 集 横瀬道路 一般国道 6 号千代田石岡バイパス（かすみがうら市市川～石岡市東大橋）事業地内埋蔵文化財調査報告書 7 2013 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 372 集 駒寄溜道路 主要地方道結城板東線バイパス事業地内埋蔵文化財調査報告書 2013 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 378 集 坊内道路 貝塚古墳群 一般県道矢幡浦糸織事業地内埋蔵文化財調査報告書 2013 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 379 集 然山西道路 一般国道 468 号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書 2013 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 384 集 千天道路 主要地方道大洗友部線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書 2014 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 392 集 西泉田伏木道路 山崎道路群 一般国道 468 号首都圏中央連絡自動車道建設事業地内埋蔵文化財調査報告書 2015 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 395 集 新田道路 上原道路 殿山道路 首都圏氾濫区域域防強化対策事業地内埋蔵文化財調査報告書 3 2015 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 402 集 馬立原道路 馬立原西道路 国道 354 号岩井バイパス事業地内埋蔵文化財調査報告書 2015 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 407 集 東田中道路 中津川道路 2 一般国道 6 号千代田石岡バイパス（かすみがうら市市川～石岡市東大橋）事業地内埋蔵文化財調査報告書 8 2016 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 419 集 吉北道路 勘十郎堀跡 東関東自動車道水戸線（鉦田～茨城空港北間）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書 2017 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 422 集 宮後道路 2 一般国道 245 号道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書 2017 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 426 集 清水原山道路 東関東自動車道水戸線（潮来～鉦田）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書 2018 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 434 集 東田中道路 2 一般国道 6 号千代田石岡バイパス（かすみがうら市市川～石岡市東大橋）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書 10 2019 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 449 集 つくば市金田西環 B 道路 金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書ⅩⅢ 2021 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 456 集 稲敷郡阿見町平頭南道路 阿見町吉原土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ 2021 年
- ・茨城県教育財団文化財調査報告第 466 集 笠間市横爪道路 一般県道平友部停車場線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書 2023 年

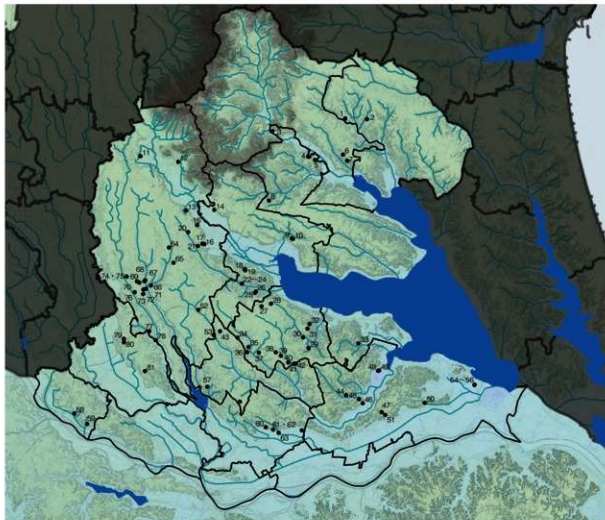
茨城県南地域における古墳時代後期の集落集成

根本 佑

1 はじめに

公益財団法人茨城県教育財団内で組織されていた古墳時代研究班は、1991・1992・1993年度の3か年にわたり、古墳時代を3期に分けて遺跡（集落跡）の分布状況を整理している¹⁾。その後約30年が過ぎ、新たな発掘調査事例も積み重なってきた。2020年には県南地域限定ではあるが、古墳時代中期の集落を改めて集成した²⁾。前稿に引き続き、茨城県教育財団の報告した茨城県南地域の遺跡について、古墳時代後期の集落を集成したのが本稿である。

対象とした地域は茨城県南地域で、小美玉市、つくば市、守谷市、龍ヶ崎市、牛久市、土浦市、稲敷市、つくばみらい市、阿見町、美浦村の8市1町1村の81遺跡が対象となった。竪穴建物跡が検出された遺跡のみを対象とし、そのほかの遺構や遺物のみが確認された遺跡は対象外としている。本来は掘立柱建物跡も集成すべきであるが、時間の都合で今回の集成は見送った。時期は6世紀と7世紀をそれぞれ前、中、後葉、末葉～初頭に区分した。年代比定は基本的に報告書の記述に従っているが、報告書に時期の記載がない場合や時期比定の範囲が広い場合は、筆者の判断で適当と思われる時期に振り分けた。



第1図 対象遺跡分布図

第1表 茨城県南部古墳時代後期集落一覧

番号	遺跡名	市町村名	流域	5世紀後葉	5C後-6C初葉	6世紀前期	6世紀中期	6世紀後葉	6C後-7C初葉	7世紀前期	7世紀中期	7世紀後葉	7C後-8C初葉	8世紀前期	調査報告番号
1	赤木新田台北遺跡	小美玉市	奥都川左岸					1							451
2	船野遺跡	小美玉市	奥都川左岸					2	1	1		2			451
3	平田原遺跡	石岡市	志麻川右岸					2			1				122
4	北浜遺跡	かすみがうら市	志麻川右岸	3	1										5
5	能久保遺跡	かすみがうら市	志麻川右岸		1	2		1						1	458
6	新田台遺跡	石岡市	志麻川左岸		2										17
7	野山遺跡	石岡市	志麻川左岸	1	1			1							13
8	上稲古西原A遺跡	かすみがうら市	矢の川右岸	4	2	1	1	4	1						5
9	五斗落遺跡	土浦市	堀川左岸			4		3	3	3	5	1			43
10	大根遺跡	土浦市	堀川左岸			2	1	1							43
11	明石遺跡	つくば市	板川右岸	2		1		2			11	1		17	164・413
12	中台遺跡	つくば市	板川左岸		1	2	1	1		1					102
13	玉取山遺跡	つくば市	板川右岸							1					263
14	岡の宮遺跡	土浦市	板川左岸	1		1		2							265
15	上野俣場遺跡	つくば市	板川右岸	1	2		24	11	7	9	19	3	8		323
16	金田西遺跡	つくば市	板川右岸										2	2	435
17	金田西野B遺跡	つくば市	板川右岸	1			3	2		5	2		6	6	449
18	笠原遺跡	土浦市	板川右岸							1	3	1	1	1	84
19	うぐいす平遺跡	土浦市	板川右岸										1	3	84
20	柴崎遺跡	つくば市	花家川左岸				4	28	10	10	5	5	3	31	54・63・72・93
21	中草遺跡	つくば市	花家川左岸					1							170
22	寺家ノ後A遺跡	土浦市	花家川左岸						1						60
23	寺家ノ後B遺跡	土浦市	花家川左岸					1							60
24	十三塚B遺跡	土浦市	花家川左岸					1							60
25	念代遺跡	土浦市	花家川右岸							1				1	111
26	平塚遺跡	土浦市	花家川右岸									1			111
27	南丘遺跡	土浦市	花家川右岸							1					64
28	西郷遺跡	阿見町	花家川右岸					1							64
29	泉合遺跡	阿見町	清明川右岸		16										137
30	赤根井内遺跡	阿見町	清明川右岸	1	1										333
31	根力遺跡	阿見町	清明川左岸					1		1					345
32	小作遺跡	阿見町	清明川左岸								1				346
33	大谷呂坂	美濃村	高橋川左岸		1										330
34	西ノ原遺跡	牛久市	乙戸川右岸				1	3	1						113
35	向田遺跡	阿見町	乙戸川右岸					9	1						474
36	反子遺跡	阿見町	乙戸川右岸							6					211
37	下小池遺跡	阿見町	乙戸川左岸	12	6	2									230
38	子池遺跡	阿見町	桂川右岸				2	1							212
39	花房遺跡	阿見町	桂川右岸					1							212
40	吉原内遺跡	阿見町	桂川右岸					1							433
41	ナギ山遺跡	牛久市	桂川左岸	3	13	11	2								233
42	新加入遺跡	阿見町	桂川左岸	2	1	1									284
43	馬場遺跡	牛久市	小野川左岸	19	31	3		1							106
44	栗前遺跡	稲敷市	湯里川左岸	2	2	1									318
45	中峰遺跡	稲敷市	小野川左岸			1									286
46	堂ノ上遺跡	稲敷市	小野川左岸	13	36	28	23	19	6						309

番号	遺跡名	市町村名	流域	5世紀 後葉	5C後葉 6C前期	6世紀 前期	6世紀 中葉	6世紀 後葉	6C後葉 7C前期	7世紀 前期	7世紀 中葉	7世紀 後葉	7C後葉 8C前期	8世紀 前期	財団報告 集番号
47	森崎後遺跡	稲敷市	小野田川右岸		1	4	2	12	2	7					308・320
48	二の宮川原	稲敷市	小野田川左岸		2	3									65
49	惣川遺跡	稲敷市	小野田川左岸			3	4	4	3						65
50	柏木古墳群	稲敷市	小野田川右岸				4	7	4	1	1	4	2	4	74
51	神尾遺跡	稲敷市	小野田川右岸	2	1	4	11	15		11	4		1	13	405
52	堀内岡山遺跡	つくば市	小野田川左岸	2	2		3	15	3						199
53	下大井遺跡	つくば市	小野田川右岸	1		1		3	1						197
54	尾島川原	稲敷市	野田川左岸		1	3	2	1			2			1	46
55	宮の脇遺跡	稲敷市	野田川左岸			2	1	1	1	1				1	96
56	後九郎兵衛遺跡	稲敷市	野田川左岸						1						46
57	山王塚遺跡	牛久市	観小瀬川右岸			1	1	1							441
58	柳原遺跡	守谷市	新利根川左岸	2	1										8
59	北今城遺跡	守谷市	新利根川左岸	2	1	1	1	4		1	1				8
60	南三島遺跡	龍ヶ崎	新利根川左岸				1	1	1	1					49
61	屋代A遺跡	龍ヶ崎	新利根川左岸	3	3	1		2		4	2				14
62	屋代B遺跡	龍ヶ崎	新利根川左岸					1	2	3	4				33・40・45
63	外八代遺跡	龍ヶ崎	新利根川左岸	1	2	2	9	8	5				3	1	2
64	下平塚木台遺跡	つくば市	荒瀬川右岸					2			2	1	1		326
65	神田遺跡	つくば市	荒瀬川左岸			1		2	1	3		2			121・134・183
66	平北田遺跡	つくば市	荒瀬川左岸			7	7	12		2					336
67	島名陸の山遺跡	つくば市	吾田川右岸	6	1	7	72	296		296	119	68		148	120・133・149・ 166・174・190・ 214・236・264・ 280・291・322・ 328・360・389・ 403・433・437
68	島名中代遺跡	つくば市	吾田川右岸	1						1		3			438
69	島名本田遺跡	つくば市	吾田川右岸	2					4	9	6	11	1	17	454・468
70	島名八幡前遺跡	つくば市	吾田川右岸					8		4		3			301
71	島名新野遺跡	つくば市	吾田川右岸									1			175
72	島名新野東遺跡	つくば市	吾田川右岸	2		1	1	6		1					215・430
73	島名地蔵遺跡	つくば市	吾田川右岸			2	9	1							191・477
74	下河原崎高山遺跡	つくば市	西谷田川左岸					2		2					478
75	下河原崎谷中台遺跡	つくば市	西谷田川左岸	3		2	7	14		5					282・292・478
76	島名フバタ遺跡	つくば市	西谷田川左岸	52	3	1	2	12							22・203・282
77	西栗山遺跡	つくば市	西谷田川右岸			21			5						119・349
78	観崎遺跡	つくば市	西谷田川右岸	3	3			2	1		1				119
79	西ノ脇遺跡	つくばみらい市	小貝川左岸		1	3			1						87
80	前田村遺跡	つくばみらい市	小貝川左岸	2	1	1			14						127・147
81	鎌田遺跡	つくばみらい市	中瀬川左岸					1		3		2			176

2 傾向

本稿の時期区分は前述の通り報告書の記載に従っている。しかし、一世紀を前葉、中葉、後葉の3時期に区分した報告書と、これに初葉～末葉を加え実質的に4時期に区分した報告書では、同じ用語を用いても実際に示している時期に若干の違いがあると考えられる。また、当財団の報告のみを集成したため遺跡分布に偏りがみられる。今回の集成で分布が薄く見える地域でも、土浦市の島山遺跡、木田余台周辺の遺跡や稲敷市の幸田・幸田台遺跡などをはじめ、調査された当該期の遺跡は数多くある。

以上のことから、今回の集成結果のみでは当期の集落変遷を語ることはできない。時期を大まかに分けた

上で、あくまでも概観として傾向を述べてみたい(図2～4)。6世紀前半には、5世紀後半の集落が規模を縮小し、かわって鳥名熊の山遺跡、上野陣場遺跡などが種数を増す。当期の大規模集落で5世紀後半から規模を維持しているのは堂ノ前遺跡のみである。6世紀後半は遺跡の数・規模が最も増加する。7世紀前半には鳥名熊の山遺跡以外で遺跡の数・規模が減少する。7世紀後半についても同様で、遺跡の数・規模は全体的に減少傾向にある。鳥名熊の山遺跡を中心とした鳥名地区と上野陣場遺跡を中心とした桜川流域の数遺跡は前期から継続している。

3 おわりに

今回は当財団の報告書に限定し、茨城県南地域の古墳時代後期の集落を集成した。今回集成を行う中で、当財団以外の機関による発掘調査報告書を含めた集成が必要であると改めて感じた。当該期の古墳と集落分布の関連付けと併せて、今後の課題としたい。

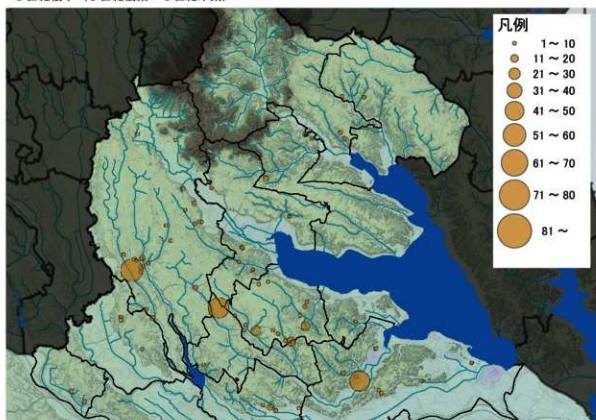
付記

図は国土地理院の提供する地理院タイル(標高・傾斜・水域タイル(基盤地図情報数値標高モデル))を加工してQGISで作成した。また、鳥名熊の山遺跡については、清水哲氏から提供された集計データを参考にした。記して感謝したい。

注

- 1) 古墳時代研究班「茨城県内における古墳時代前期の遺跡について」『研究ノート』 創刊号 茨城県教育財団 1992年
古墳時代研究班「茨城県内における古墳時代中期の遺跡について」『研究ノート』 2号 茨城県教育財団 1993年
古墳時代研究班「茨城県内における古墳時代後期の遺跡について」『研究ノート』 3号 茨城県教育財団 1994年
- 2) 根本佑・菅川貴之・本橋弘巳・瑞厚宣・見越広幸・高屋須平「茨城県南部における古墳時代中期の集落変遷」『研究ノート』 17号 茨城県教育財団 2020年

5世紀後半(5世紀後半～5世紀末葉)

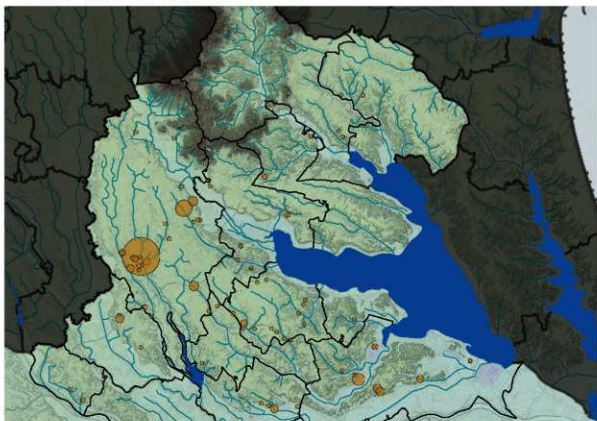


第2図 時期別遺跡分布図(1)

6世紀前半（6世紀前半～6世紀中葉）



6世紀後半（6世紀中葉～6世紀末葉）



第3図 時期別遺跡分布図(2)

7世紀前半（7世紀前半～7世紀中葉）



7世紀後半（7世紀中葉～7世紀末葉）



第4図 時期別遺跡分布図(3)

参考文献

- 板井二郎 1980『外八代道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第2集
- 山本貴之ほか 1980『上稲吉西原古墳 上稲吉西原A道跡 上稲吉西原B道跡 上稲吉西原C道跡 中佐谷十百道跡 中佐谷A道跡 中佐谷B道跡 大塚古墳群 松延古墳群 志筑道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第5集
- 佐藤正好ほか 1981『北今城道跡 乙子道跡 大日道跡 座内道跡 篠根入・仲原道跡 鈴塚B・C道跡 鈴塚古墳群 今城道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第8集
- 山本勝男 1982『兵崎道跡 大谷津A道跡 対馬塚道跡 大谷津B道跡 大谷津C道跡 外山道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第13集
- 久野俊彦ほか 1982『成沢道跡 屋代A道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第14集
- 和田肇次 1983『新池台道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第17集
- 佐野正 1983『ツバタ道跡 高山古墳群』茨城県教育財団文化財調査報告 第22集
- 根本康弘 1986『屋代B道跡1』茨城県教育財団文化財調査報告 第33集
- 鈴木美治 1987『屋代B道跡2』茨城県教育財団文化財調査報告 第40集
- 柴正ほか 1987『五斗落道跡 大盛道跡 弁ノ内道跡 原ノ内道跡 グリン山道跡 真木ノ内道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第43集
- 佐藤正好 1988『屋代B道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第45集
- 人見晩朗 1988『尾島貝塚 宮の脇道跡 後九郎兵衛道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第46集
- 小山咲一 1989『南三島道跡3・4区(2)』茨城県教育財団文化財調査報告 第49集
- 高村勇 1989『柴崎道跡1・2・1区』茨城県教育財団文化財調査報告 第54集
- 小松崎盛彦 1990『寺ノ後A道跡 寺ノ後B道跡 十三塚A道跡 十三塚B道跡 永国十三塚道跡 田鎌倉街道』茨城県教育財団文化財調査報告 第60集
- 佐藤正好ほか 1991『柴崎道跡2区 中塚道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第63集
- 根本康弘ほか 1991『西郷道跡 南丘道跡 長峰道跡 敷光道跡 宮塚道跡 石粉館跡 内路地台道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第64集
- 鈴木美治 1991『二の宮貝塚 大日山古墳群 恵川道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第65集
- 土生朗治 1992『柴崎道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第72集
- 松浦敏 1992『柏木古墳群』茨城県教育財団文化財調査報告 第74集
- 土生朗治 1994『寄居道跡 うぐいす平道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第84集
- 吉原作平 1994『西ノ脇道跡 前田村道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第87集
- 萩野谷信 1994『柴崎道跡2区・3区』茨城県教育財団文化財調査報告 第93集
- 吉川明宏ほか 1995『中台道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第102集
- 白田正子 1996『馬場道跡 行人田道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第106集
- 矢ノ倉正男 1996『石臼貝塚東道跡 内路地台道跡 念代道跡 平坪道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第111集
- 深谷徳二ほか 1996『中下根道跡 西ノ原道跡 華人山道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第113集
- 渡邊幸雄 1997『根崎道跡 西栗山道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第119集
- 新井聡ほか 1997『熊の山道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第120集
- 成島一也 1997『神田道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第121集
- 仙波亨 1997『半田原道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第122集
- 吉原作平ほか 1997『高野台道跡 前田村道跡D・F区』茨城県教育財団文化財調査報告 第127集
- 小島敏ほか 1998『熊の山道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第133集
- 長岡正雄 1998『神田道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第134集
- 矢ノ倉正男ほか 1997『星合道跡 中ノ台道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第137集
- 小林孝ほか 1999『前田村道跡J・K区』茨城県教育財団文化財調査報告 第147集
- 吉原作平ほか 1999『熊の山道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第149集
- 寺門千勝ほか 2000『明石道跡 明石北原道跡 上白畑道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第164集
- 矢ノ倉正男ほか 2000『熊の山道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第166集
- 高野鈴夫ほか 2001『中原道跡3』茨城県教育財団文化財調査報告 第170集
- 藤田哲也ほか 2001『熊の山道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第174集
- 稲田義弘 2001『鳥名前野道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第175集
- 川村満博ほか 2001『鎌田道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第176集
- 飯島一生 2002『神田道跡3』茨城県教育財団文化財調査報告 第183集
- 稲田義弘 2002『熊の山道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第190集
- 寺門千勝ほか 2002『鳥名前野東道跡 鳥名境道跡 谷田部漆道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第191集
- 鳥田和宏 2003『下大井道跡2』茨城県教育財団文化財調査報告 第197集
- 川村満博ほか 2003『梶内山道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第199集
- 吹野富夫ほか 2003『鳥名八幡前道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第201集
- 菅田修 2003『鳥名ツバタ道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第203集
- 浅野和久 2003『岡の宮道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第205集
- 小竹茂美ほか 2004『下小池道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第210集

後藤孝行はか2004『ワサル下道跡 反子道跡 大高田道跡 前畑道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第211集
 綿引英樹はか2004『谷ノ沢道跡 手線道跡 花房道跡 大日道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第212集
 福田義弘はか2004『烏名熊の山道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第214集
 飯泉達司2004『烏名前野東道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第215集
 石川義信はか2005『ナギ山道跡1 柏峯B道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第233集
 松本直人2005『烏名熊の山道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第236集
 奥沢哲也2006『玉取向山道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第263集
 田中幸夫はか2006『烏名熊の山道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第264集
 酒井雄一はか2007『烏名熊の山道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第280集
 高野裕隆2007『下河原崎谷中台道跡 烏名ツバタ道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第282集
 本橋弘はか2008『中峰道跡 見松道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第286集
 齋藤真弥はか2008『烏名熊の山道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第291集
 齋藤真弥2008『下河原崎谷中台道跡 下河原崎高山古墳群』茨城県教育財団文化財調査報告 第292集
 綿引英樹はか2008『薬師入道跡2』茨城県教育財団文化財調査報告 第296集
 成島一也はか2009『薬師後道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第308集
 前島直人はか2009『堂ノ上道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第309集
 早川麗司はか2009『東前道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第318集
 早川麗司2009『烏名熊の山道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第322集
 川井正一はか2009『上野降場道跡2』茨城県教育財団文化財調査報告 第323集
 白田正子はか2009『下平塚木台道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第326集
 小澤重雄2010『烏名熊の山道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第328集
 櫻井完介2010『大谷貝塚2』茨城県教育財団文化財調査報告 第330集
 鹿島直樹2010『糸根井向道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第333集
 舟橋 理2011『平北田道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第336集
 寺内久永はか2011『根方道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第345集
 清水 哲ほか2011『小作道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第346集
 寺内久永はか2011『西栗山道跡2 根崎道跡2』茨城県教育財団文化財調査報告 第349集
 大久保隆史2012『薬師後道跡2』茨城県教育財団文化財調査報告 第350集
 仲村浩一郎はか2012『烏名熊の山道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第360集
 小林和彦はか2014『烏名熊の山道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第389集
 佐藤一也2015『烏名熊の山道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第403集
 齋藤和浩はか2016『清水古墳群 神屋道跡 神屋南道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第405集
 江原美奈子2016『明石道跡2』茨城県教育財団文化財調査報告 第413集
 奥沢哲也はか2018『烏名熊の山道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第431集
 菅田貴之2018『吉原向道跡 牛頭座道跡 赤太郎道跡2』茨城県教育財団文化財調査報告 第433集
 荒井保雄2019『九重東岡庵寺 金田西道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第435集
 海老澤稔はか2019『烏名熊の山道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第437集
 堀野宣2019『烏名中代道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第438集
 茂木悦男2020『烏名前野東道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第439集
 獅子内一成2020『山王前道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第441集
 野内智一郎はか2021『金田西坪B道跡2』茨城県教育財団文化財調査報告 第449集
 齋藤貴雄はか2021『館野道跡 並木新田台北道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第451集
 江原美奈子はか2021『烏名本田道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第454集
 獅子内一成2022『徳久保道跡2』茨城県教育財団文化財調査報告 第458集
 吹野富美夫はか2023『烏名本田道跡2』茨城県教育財団文化財調査報告 第468集
 柳瀬剛2024『向田道跡』茨城県教育財団文化財調査報告 第474集
 吹野富美夫はか2025『烏名境松道跡3』茨城県教育財団文化財調査報告 第477集
 天野早苗2025『下河原崎谷中台道跡3 下河原崎高山道跡 下河原崎高山古墳群』茨城県教育財団文化財調査報告 第478集

つくば市中北東藤四郎遺跡の火葬墓

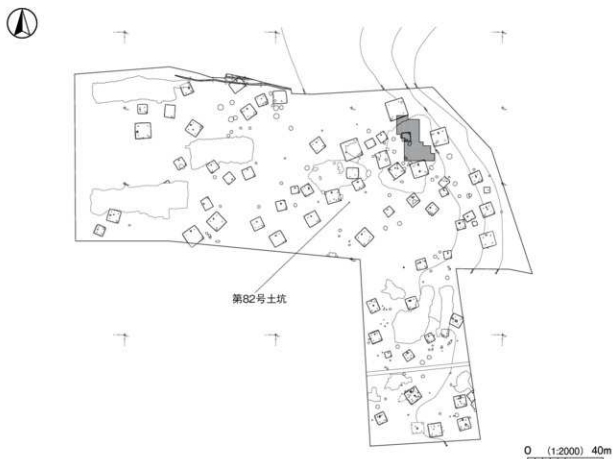
—第 82 号土坑の再報告—

天野 早苗

1 はじめに

元中北東藤四郎遺跡は、つくば市の南西部の旧谷田部町域に位置し、西谷田川とその支流の小河川に挟まれた台地の東縁部、標高 24 m ほどのほぼ平坦な台地上に立地している。令和元年 11 月～令和 2 年 4 月に 25,957m²の範囲が調査され、令和 4 年度に整理作業が行われ、『元中北東藤四郎遺跡 上河原崎前山遺跡』〔茨城県教育財団調査報告〕第 469 集として報告されている¹⁾。整理作業の結果、旧石器時代から古墳時代まで断続的に土地利用がなされていた遺跡であることが報告されている。特に古墳時代中期前葉（5 世紀前葉～中葉）の堅穴建物跡は 68 棟確認されており、その多くが焼失住居で、石製模造品などの祭祀遺物が多く出土した集落であることが特筆される。

今回は、報告書の中で時期不明の土坑として扱われていた第 82 号土坑の図面と写真を再確認したところ、平安時代の火葬墓であったことが判明したため、正確な遺構実測図と未掲載であった遺物の実測図を掲載し、再報告を行う。また、合わせて周辺地域から確認されている火葬墓の資料や周辺の奈良・平安時代の集落域との分布関係を示す資料の提示を行い、報告としたい。



第 1 図 元中北東藤四郎遺跡遺構配置図 (1/2000)

2 第82号土坑と出土蔵骨器について

報告書内で掲載された遺構図版に誤りがあったため、修正した遺構図、出土遺物実測図と観察表、記録写真を第2～5図、第1表に示した。第82号土坑は、調査区中央部のH5c0区に位置しており（第1図）、長径38cm、短径35cmの円形で、深さは27cmの土坑である。底面は皿状で、壁は外傾している。土坑の中央部には土師器の甕が正位で据えられ、ローム主体の第1・2層で埋め戻されている。甕の上部は欠損しており、確認できなかった。甕内部からは焼成人骨片が複数確認されており、蔵骨器として使用されたものと考えられる。甕の上部が欠損しているため、詳しい時期は不明であるが、9世紀代と考えられる。焼成人骨については、メモ写真の記録を撮り、自然科学分析等は行わず廃棄している。当遺跡からは、同時期の遺構は他に確認されておらず、平安時代の遺構はこの1基のみである。

蔵骨器として使用された甕は、残存する器高が23.3cm、底径9.1cmである。体部外面は縦方向の磨きが施され、内面は横方向のナデ・ヘラナデの痕跡が見られる。底部はヘラ削りにより仕上げられている。

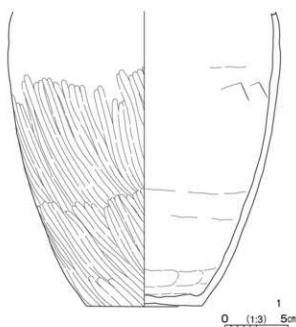
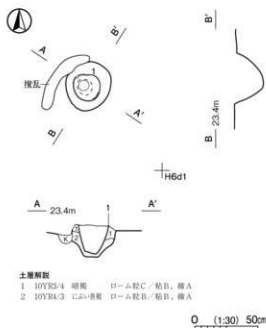
第1表 第82号土坑出土遺物一覧（第2図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	甕	—	(23.3)	9.1	灰白・灰黄・赤褐色粘土	にぶい褐色	普通	体部外面縦方向の磨きナデ、ナデ 底部ヘラ削り	底面	65%

3 周辺地域の火葬墓について

火葬墓については『続日本紀』にみられる700年の僧道昭がはじまりとされており、火葬風習は8世紀から畿内へ広がり、その後地方へ広がっていく。県内の古代火葬墓の研究については、吉澤悟氏により集成がなされており^{2) 3)}、水戸市を中心とする那珂川流域と、土師・石岡市を中心とする霞ヶ浦沿岸域に分布の中心が見られ、8世紀には数例しか確認できなかった火葬墓が9世紀代に急激に増加するとされている。また、那珂川流域では蔵骨器を逆位で埋納する例が多く、蔵骨器には須恵器の使用率が高く、壺や甕に杯・盤で蓋をする器種構成がとられることが多いのに対し、霞ヶ浦沿岸域では、正位で埋納する例が多く、蔵骨器には須恵器と土師器が併用され、蓋には須恵器鉢、土師器杯・皿・椀などの多様な器種を採用していることが指摘されている。

当遺跡周辺では、同台地南端の台地縁辺部に位置する下河原崎谷中台遺跡⁴⁾と下河原崎高山遺跡⁵⁾、当遺跡から南東方向7.6kmの谷田川流域の台地縁辺部に位置する谷田部第六天下遺跡⁶⁾で発掘調査による火葬墓の事例が報告されている（第6図）⁷⁾。下河原崎谷中台遺跡の第1号火葬墓は、径50cm、深さ25cmの円形の土坑で、逆位で埋納された須恵器の甕と、甕内部から蓋として使用されたと考えられる須恵器の杯・盤が出土している。時期は、9世紀前半である。下河原崎高山遺跡からは、長径52cm、短径48cm、深さ22cmの楕円形の土坑から、正位で埋納された須恵器の甕と、蓋として使用された須恵器の鉢が出土している。須恵器の甕内部からは焼成人骨片が出土し自然科学分析が行われている⁸⁾。時期は、9世紀中葉である。谷田部第六天下遺跡からは、堅穴建物跡調査時に確認された正位で埋納された土師器の甕が出土し、内部からは焼成人骨片が出土している。時期は、9世紀後葉である。今回再報告を行った火葬墓は、上部が削平されているため蓋の存在は不明であるが、土師器の甕を蔵骨器として使用し正位で埋納されている。時期は9世紀代である。以上の事例から周辺地域の蔵骨器の埋納方法の傾向としては、正位埋納が多く、蔵骨器としては須恵器・土師器が併用されている点などから、吉澤氏の指摘する霞ヶ浦沿岸域で多く見られる特長と共通する。



第2図 第82号土坑 遺構・遺物実測図



第3図 第82号土坑遺物出土状況

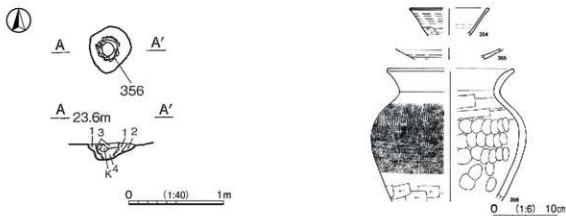


第4図 第82号土坑出土蔵骨器

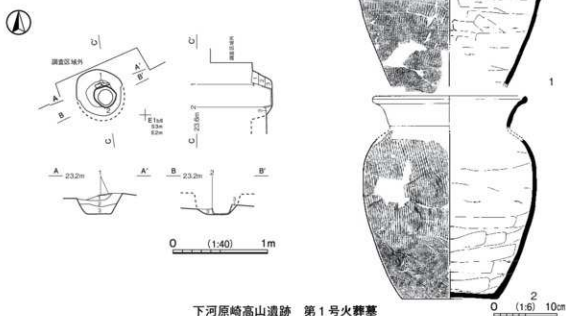


第5図 第82号土坑 蔵骨器内出土焼成人骨

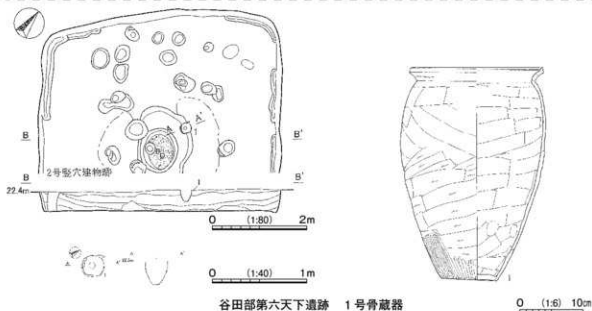




下河原崎谷中台遺跡 第1号火葬墓

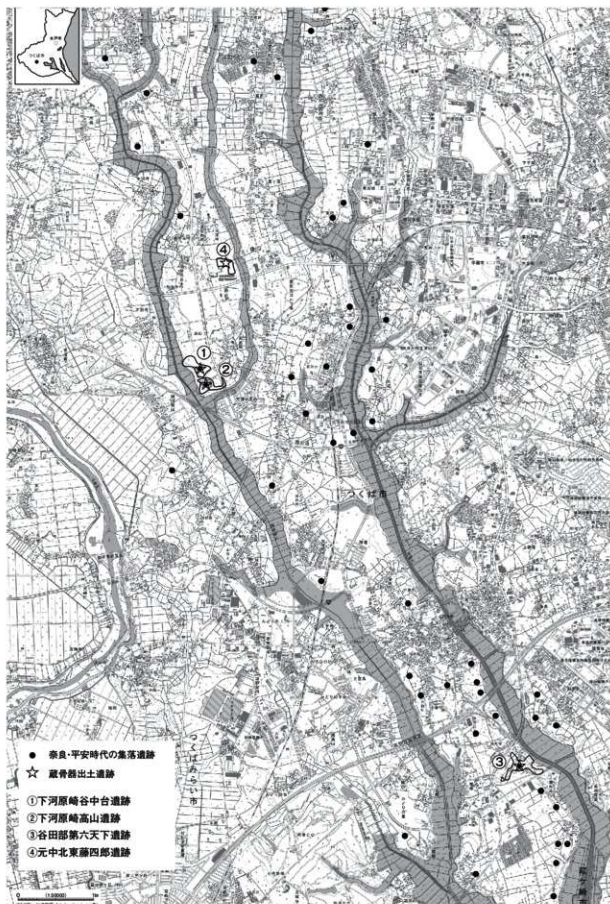


下河原崎高山遺跡 第1号火葬墓



谷田部第六天下遺跡 1号骨蔵器

第6図 元中北東藤四郎遺跡周辺地域火葬墓・出土蔵骨器



第7図 火葬墓出土遺跡・周辺遺跡分布図（国土地理院地図に地質分類図などを加筆して作成）

4 周辺の集落と火葬墓の分布について

調査により明確になっている奈良・平安時代の集落跡は少ないが、茨城県遺跡地図に掲載されている谷田川・西谷田川とその支流周辺の奈良・平安時代の集落跡を分布図に示した(第7図)。西谷田川・谷田川流域には、集落が点在していることがわかるが、当遺跡の所在する台地上では集落域はほぼ確認されていない。集落域とはしているものの、台地南端部に位置する下河原崎谷中台遺跡からは8世紀後葉の竪穴建物跡1棟、下河原崎高山遺跡からは9世紀中葉の竪穴建物跡1棟が確認されているのみで、集落本体からは離れて位置する竪穴建物跡と考えられる。また、下河原崎谷中台遺跡の竪穴建物跡からは鉄鉢形土器、墨書土器が出土し、下河原崎高山遺跡の建物跡からは灯明として使用された須恵器杯が出土していることが特筆される。谷田川右岸に位置する谷田部第六天下遺跡も周辺に集落域は点在しているものの、遺跡内からは9世紀代の竪穴建物跡⁹⁾が1棟確認されているのみで同じく集落本体から離れて位置する建物跡の可能性もある。発掘調査事例が少なく集落の本体がどこに位置しているのかなど不明な点は多いが、周辺地域の火葬墓の分布は台地縁辺部に位置し、集落域とは離れた位置に造営される傾向があるものと考えられる。

5 おわりに

元中北藤四郎遺跡の第82号土坑について、再整理を行い火葬墓として再報告を行うことができた。報告書作成時に見落とされていたが、火葬墓研究において重要な資料となると考えられる。報告を行った資料については、県埋蔵文化財センターにて保管されている。また、今回は資料・図面の再報告を主として行い、周辺の火葬墓の発掘調査事例の紹介と、周辺の奈良・平安時代集落と火葬墓の分布域について触れた。今後、県内の火葬墓研究の一助となれば幸いである。

註

- 1) 坂本勝彦 2023年『元中北藤四郎遺跡 上河原崎高山遺跡 上河原崎・中西特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書7』[茨城県教育財団文化財調査報告]第409集
- 2) 吉澤信 1995「茨城における古代火葬墓の地域性—土浦市博物館保管の骨甕器の資料紹介および県内事例の集成から—」[土浦市博物館紀要]第6号
- 3) 吉澤信 1996「常陸国における古代火葬墓の分布とその背景」[考古学雑誌 西野元先生追記記念論集]
- 4) 高野裕憲 2007「下河原崎谷中台遺跡 烏名ツバタ遺跡 上河原崎・中西特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3」[茨城県教育財団文化財調査報告]第282集
- 5) 天野早苗 2025「下河原崎谷中台3 下河原崎高山遺跡 下河原崎高山古墳群3 上河原崎・中西特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書7」[茨城県教育財団文化財調査報告]第478集
- 6) 有山佳世 2023「谷田部第六天下遺跡 造成に伴う発掘調査報告書」有限会社毛野考古学研究所 茨城支所
- 7) 周辺域からは離れるが、つくば市域ではこの他に5例の骨甕器の出土事例が報告されている。
 - 1 下河原崎高山古墳群周辺出土 須恵器短頸壺、9世紀前—中葉。詳細は不明(谷田部の歴史編集委員会 1975)
 - 2・3 東岡遺跡出土 骨甕器1:須恵器甕が正位、骨甕器2:須恵器甕が正位、特殊な器形。2つの甕が小石室に収められる。9世紀代(國學院大學考古学資料室 1975 國學院大學考古学資料室要覧 1974 骨甕器)
 - 4 吉沼出土 須恵器壺、9世紀前—中葉、大徳公民館に保管、吉沼貝塚周辺出土とあるが詳細は不明である。(吉澤 1995)
 - 5 平沢3号墳出土 平沢3号墳横穴式石室前庭部から出土、骨甕器:須恵器短頸壺 蓋:須恵器高台付杯2点、8世紀前葉(田中裕・吉澤信 2011『筑波大学 先史学・考古学研究』第22号)
- 8) 註5に同じ
- 9) 報告書内では、土師器杯・土師器甕が出土しているとの記載があるが、実測図には土師器の甕の体部のみの記載であるため、明確な時期が判別できなかったため、9世紀代とした。

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows11 Pro
	レイアウト	Adobe InDesign CC 2025
	図版作成	Adobe Illustrator CC 2025
	写真調整	Adobe Photoshop CC 2025
組版	OpenType13綴リユウミンPro・L基本	
	Adobe InDesign CC 2024	
印刷	オフセット印刷	
写真製版	スクリーン線数	モノクロ175線
・印刷所へは、Adobe InDesign CC 2025でレイアウトしたものを入稿		

研究ノート 第22号

令和7（2025）年3月31日 発行

編集・発行 公益財団法人茨城県教育財団
〒310-0911
水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
電話 029-225-6587
<https://www.ibaraki-maibun.org>

印刷所 山三印刷株式会社

© 公益財団法人茨城県教育財団
ISSN 0919-1453

